

長野市の埋蔵文化財第8集

篠ノ井遺跡群

一大規模自転車道地点遺跡の調査報告一

1980.3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序 文

篠ノ井遺跡群は、塩崎遺跡群・横田遺跡群と連なる自然堤防上の遺跡であります。またこのような地形上に遺跡が展開することは長野市をはじめとする善光寺平の特色の一つであります。ここには弥生時代から平安時代にわたっての複合遺跡で、大集落址が予想されている周知の遺跡の一つであります。

さてこの地に長野県により大規模自転車道の建設計画がもち上がってきました、このような重要な遺跡でありますので、長野県の委託を受けて急ぎ発掘調査を実施し、記録保存をはかることになり、12月に調査を実施いたしました。

折から嚴寒期を迎える中で、長野市教育委員会・長野市遺跡調査会がこれにあたり、本書のような学術上重要な成果を得ましたことはご同慶のいたりであります。

この報告書の刊行にあたり、教育・学術研究の場で大いに活用され、また悠久の過去への道しるべとして利用していただければ望外の喜びであります。

最後に発掘調査から報告書作成までご尽力をいただいた長野市遺跡調査会ならびに同調査団の森嶋團長他調査員の皆さん、また地域において埋蔵文化財に深い御理解をいただき発掘調査に終始ご協力をいただいた区長・地主・区民の方々、あわせて多大なる励ましをいただいた多くの関係者に、衷心より感謝の意を表します。

昭和55年3月

長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長

中 村 博 二

例　　言

1. 本書は昭和54年度に長野建設事務所と長野市遺跡調査会との契約に基づいた国庫補助事業大規模自転車道建設に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く詳細に図示・記述することに努めた。遺物の詳細については図前に表にして記した。
3. 遺構図は青木(和)が担当整図した。
4. 遺物の実測は竹内・石上・直井・小林が担当し、小林・石上が整図した。
5. 遺構写真は直井・竹内・矢口が撮影し、遺物については竹内が担当した。
6. 土器の拓影は小林が行った。
7. 遺物実測図中推定復元可能なものは鎖線で、黒色処理されるものは小黒点で、赤色塗彩のものは淡赤色でそれぞれ表示した。
8. 遺構・遺物の執筆は各調査員の遺構カード等の諸記録により調査員協議の上、第1章を事務局、第2～4章を矢口が主として行い、その責は矢口にある。
9. 遺物や関係図面・諸記録は長野市教育委員会で保管している。
10. 本書の編集は長野市教育委員会が行った。
11. 本調査の庶務・渉外・印刷関係等の業務は事務局が行った。

本文目次

序文
例言

長野市教育委員会教育長 中村博二 M
長野市遺跡調査会長

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
1 経過	1
2 調査地と調査	1
第2節 調査日誌	2
第3節 調査会(団)の編成	3
第4節 調査協力者一覧	4
第2章 遺跡周辺の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	9
第3章 遺構と遺物	12
第1節 住居址	12
1 第1号住居址	12
2 第2号住居址	13
3 第3号住居址	13
4 第4号住居址	13
5 第5号住居址	15
6 第6号住居址	15
7 第7号住居址	16
8 第8号住居址	16
9 第9号住居址	18
10 第10号住居址	19

11 第11号住居址	20
12 第12号住居址	21
13 第13号住居址	22
14 第14号住居址	22
15 第15号住居址	23
16 第16号住居址	24
17 第17号住居址	25
18 第18号住居址	25
19 第19号住居址	26
20 第20号住居址	27
21 第21号住居址	28
22 第22号住居址	29
23 第23号住居址	31
24 第24号住居址	32
25 第25号住居址	33
26 第26号住居址	33
27 第27号住居址	34
28 第28号住居址	34
29 第29号住居址	36
30 第30号住居址	37
31 第31号住居址	38
第2節 井 戸 址	38
第3節 墓 址	39
1 方形周溝墓	40
2 土 壤 墓	41
第4節 溝 址	42
第5節 その他の遺構遺物	44
第4章 結 語	46

挿図目次

第1図 遺構分布図西より(1)	5
第2図 遺構分布図西より(2)	6
第3図 遺構分布図西より(3)	7
第4図 主要遺跡分布図及び調査地	10
第5図 第1・2号住居址実測図, 第2号住居址出土土器	12
第6図 第3・4号住居址・溝址1実測図, 第3号住居址出土土器	13
第7図 第5号住居址・井戸址2実測図, 同住居址出土土器	14
第8図 第6・7号住居址実測図	15
第9図 第6・7号住居址出土遺物	16
第10図 第8号住居址実測図, 出土遺物	17
第11図 第9・10号住居址・井戸址5実測図	18
第12図 第9・10号住居址出土土器	19
第13図 第11号住居址実測図, 出土遺物	20
第14図 第12号住居址実測図, 出土土器	21
第15図 第13号住居址実測図, 出土土器	22
第16図 第14・15号住居址実測図	22
第17図 第14号住居址出土土器	23
第18図 第15号住居址出土土器	24
第19図 第16号住居址実測図	24
第20図 第16号住居址出土土器拓影	25
第21図 第17号住居址実測図	25
第22図 第18号住居址実測図, 出土遺物	26
第23図 第19号住居址実測図, 出土土器	27
第24図 第20号住居址実測図, 出土土器	28
第25図 第21号住居址実測図	28
第26図 第21号住居址出土土器	29
第27図 第22号住居址実測図	29
第28図 第22号住居址出土土器	30
第29図 第23号住居址実測図, 出土土器	31

第30図	第24・25号住居址実測図、第24号住居址出土土器拓影	32
第31図	第25号住居址出土土器	33
第32図	第26号住居址実測図、出土土器	34
第33図	第27号住居址・溝址7実測図、出土土器	35
第34図	第28号住居址実測図、出土土器	35
第35図	第29号住居址実測図、出土土器	36
第36図	第30号住居址実測図、出土土器	37
第37図	第31号住居址実測図	38
第38図	井戸址1・3・4・6～8実測図	39
第39図	方形周溝墓実測図	40
第40図	方形周溝墓出土土器	41
第41図	土壙墓実測図	42
第42図	溝址2・4・5実測図	42
第43図	溝址3・6実測図、溝址1～3出土土器	43
第44図	その他の遺物	44
第45図	第8～11号住居址検出面出土遺物	45

図 版 目 次

第1図版	遺跡近影	第14図版	第29・30号住居址
第2図版	東側遺構群	第15図版	第31号住居址、井戸址3・4
第3図版	第1～4号住居址、溝址1	第16図版	井戸址1・2・8
第4図版	第5・6号住居址	第17図版	井戸址6・7・方形周溝墓
第5図版	第7・8号住居址	第18図版	方形周溝墓
第6図版	第9～11号住居址、井戸址5	第19図版	土壙墓・溝址1・4
第7図版	第13・15号住居址	第20図版	溝址3、掘り方状遺構
第8図版	第19・21号住居址	第21図版	遺物出土状態
第9図版	第22・23号住居址	第22図版	遺物出土状態
第10図版	第17・18号住居址	第23図版	第6・8・9・15・18・19号住居址出土土器
第11図版	第24～26号住居址	第24図版	第21・22・24・25・30・31号住居址出土土器
第12図版	第27・28号住居址	第25図版	方形周溝墓出土土器及び溝址3・第8～11 住宅址検出面・第18号住宅跡出土鐵製品
第13図版	西側遺構群	第26図版	調査スナップ

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

1 経過

更埴から長野市の千曲川右岸堤防上に大規模自転車道（サイクリング道）建設が進行する中で、昭和54年度において長野建設事務所は国庫補助を受け篠ノ井塩崎地籍五輪から国鉄信越線庄の宮跡切手前にかけての建設を本年度事業として予定していた。この計画では現堤防の外側横に専用自転車道をつくるもので、埋設される地域は現堤防より約1～5m程の細長いものであった。この地は篠ノ井遺跡群として周知の遺跡の一つであったので、建設計画への対応として県教委文化課より協議の依頼があり、担当事務所と現地調査をくりかえし、表面遺物の散布状態・地形及び過去の調査結果により、緊急に発掘調査を実施する必要があるとの結論に達した。ただ乳良根古神社付近及びそれ以東（川下）は河川が近くまで迫っており、遺跡の存在が定かでないし、調査地域巾が1m内外と狭いため土砂の崩壊を恐れ、危険防止のため調査をとりやめ、また神社西は聖川の旧河床及千曲川の決壊の個所で後に横田の土で埋立てが行なわれ、遺構等があったにしても既に流失しているものと思えるので調査の主体を埋立て地より西側に求めた。調査地は全長約300mである。

この間調査体制の確立を進めていたのであるが、公共各種の包蔵地の調査・行事等が重なり、調査会事務局（市教委社会教育課）は調査団の組織作りに困難を極め今年度調査は無理との結論に達したが、建設事業の性格上、調査団長・調査員各位に無理をお願いし、また塩崎関係区長及び近隣土地所有者の援助のもとに主行事・計画が終了した後に調査を実施することになった。

調査期間は時節を鑑みるに遺構の凍結・しみどけによる土砂の崩壊・雪による調査遅延等が考慮される問題として残っていたので安全対策と調査の早期終了を目標に12月中旬に実施。終了する必要があった。そこで考えられるあらゆる防災に努める器具をそろえるためと調査地の狭い範囲で土積場の確保に日数を必要とし、当初計画よりやや遅れ12月5日から実質調査を開始することにした。

2 調査地と調査

前述したとおり千曲川・聖川左岸堤防上にあり、その巾は約1～5mの、全長約300mを超

える狭長なもので、いわばトレンチ調査による遺構確認の調査であった。調査地は千曲川上流から塩崎遺跡群・簾ノ井遺跡群・横田遺跡群と連なる自然堤防上に位置し、各時期を内包する複合遺跡の一つである。この簾ノ井遺跡群の千曲川沿いを調査したのが本調査である。字名では五輪・高畠・堀の内である。調査に際し現堤防を破壊してはならない、境界標柱を破壊移動してはならない、民有地への配慮等の規制があり、また過去の経験から表土下1.2~1.4mに平安時代の遺構面があることから、規制と排土の問題に頭をいためた。これらのことから標柱を保存するためにその付近を残したり、調査できなかつたり、民有地に対しては土崩れ等から現状確保のため境界より30~50cmの間隔をあけての調査であった。また前記の規制を鑑み予算の範囲内で当初計画を遂行できるかにあった。事前に排土は堤防に上げ調査終了後それを埋め戻せるとの甘い判断があった。これは河川法によりこの計画は断念せざるをえなく、急拠土積保管地の確保が必要であったし、また調査をする以上出来る限り徹底的にしたいものと思ひ、調査地ほぼ全域を遺構面まで掘り下げ排土することになり、周辺民有地及び軒良根古神社境内を借りることになった。

第2節 調査日誌

11月30日 調査に先立ち、調査範囲（境界）の確認を行う。長野建設事務所、県教委文化課が立ち合う。区長等に作業員募集を依頼する。

12月1日 調査に先立ち、表土除去作業を川中島建設に依頼する。

12月2日 周辺民有地権者と一時土積及び作物補償等を話し合う。排土一時保管場所に軒良根古神社敷地をお願いする。

12月3日(晴) 重機搬入し、土砂除去に伴う道路作りを行うも、霜溶にてうまくいかず山砂利を入れる。

12月4日(晴) 前日の方法もうまくいかず、重機（バックホー）をもう一台入れ二段構えで排土する。排土作業順調になる。器材搬入。

12月5日(曇) 遺構面までの表土除去を昨日に引き続き行う。本日より本格的調査を開始する。調査地内の草刈り及び調査地の設定をする。

12月6日(曇) 聖川堤防で長野県管理地区東側より調査を進める。残土処理と遺構プラン追求に終日費やす。第17号住居址は床面のみ残存する。

12月7日(曇) 第15・17・18号住居址の検出を実施する。

12月8日(晴) 調査地西側の残土処理しながら遺構プランの確認を行う。昨日に引き続き第14~18号住居址の調査をすすめ、終了後写真撮影を行う。

12月9日(晴) 昨日と同様作業を行う。土砂運搬用オートキャリアの活躍が著しい。第14~18号住居址の測量を行う。

12月10日(晴) 周辺の山に雪が来る。残土処理をする一方、調査地西側にある溝状遺構（後

にくの字状に折れる方形周溝墓と判明)から調査をする。

12月11日(晴) 溝址の調査を進める。意外と深く、底面より変形土器の完形品が出土した。第14~18号住居址附近の埋めもどしをする。

12月12日(晴) 溝址の調査を進める一方、セクションの実測をする。溝は序々に浅くなり、上面では確認できなかったが、ほぼ直角に曲るようであり、この曲り付近に住居址があるようである。第24・25号住居址の調査をする。

12月13日(晴) 溝址の調査を続ける一方、調査地東端から本日よりミニバックホーにより表土除去を行う。

12月14日(晴) 溝址の写真撮影・実測終了後これにより切られる第29号住居址の調査と新たに五輪地籍に東西4m・南北3mのトレンチを設定し調査を開始する。土器の洗浄をする。

12月15日(曇) 調査地東端より残土処理する一方五輪地籍の調査を進める。住居址がある模様。第25~28号住居址及び溝址5~7を調査完掘し、写真撮影後実測を行う。土器洗浄する。

12月16日(曇) 五輪地籍の住居址(31号)の精査及び写真撮影を行う一方、第19・20・24号住居址・井戸址8の調査をする。残土処理を継続する。

12月17日(晴) 残土処理後遺構プランを追求する。第1~5号住居址の調査を開始する。

12月18日(晴) ミニバックホーによる表土除去終了。第21・23号住居址のプラン確認後調査にかかる。第1~5号住居址・井戸址1・2の精査を行い、写真撮影・実測作業を行う。

12月19日(曇) 第21~23号住居址の精査後測量・写真撮影を行う一方第6~8号住居址及び井戸址のプラン追求し調査にかかる。重機及び人力で調査地西側から民有地に上げた土砂の埋め戻しをする。

12月20日(晴) 昨夜の雨で土が重い。第6~11・22号住居址・井戸址4~5の精査後写真撮影・実測をする。最初に調査した東側の残土処理をする。初期に調査した地点の埋め戻し終了。

12月21日(曇) 第10・12・13・22号住居址・井戸址6・7、土壤墓、溝址3のプラン確定後調査にかかる。

12月22日(晴) 昨日の調査のうち溝址3を除き、精査後写真撮影及び実測作業を行う。調査地東よりミニバックホーにより埋め戻しを開始する。

12月23日(雨) 遺構図の整理及び標高を引き出す作業を行う。

12月24日(晴) 溝址の精査を行うも歯骨の出土で手間取る。検出後住居址・土壤墓の写真撮影・測量を行う。本日で遺構等調査を終了する。ミニバックホーによる埋め戻し終了する。

12月25日 建設省管理の堤防及び民有地上の残土処理する一方、発掘器材を撤収し、本調査を完了する。

第3節 調査会(団)の編成

本調査会は埋蔵文化財の保護・保存及び調査企画を主なる業務とし、調査結果を有效地に生かすため設立されたもので、調査会構成は以下のとおりである。

1 調査会

会長 中村博二 長野市教育委員会教育長

委員 米山一政 長野市文化財保護審議会々長

・ 桐原 健 〃 委員

・ 森嶋 稔 調査団長

・ 千野和徳 長野市教育委員会教育管理部長

・ 関川千代丸 〃 嘱託

・ 矢口忠良 〃 社会教育課主事

監事 青沼欽一郎 〃 庶務課長

2 調査団

調査団長 森嶋 稔（日本考古学協会員・上山田小学校教諭）

・ 主任 矢口忠良（ 〃 、長野市教育委員会主事）

調査員 竹内 稔（長野県考古学会員・信大学生）

・ 石上周藏（ 〃 、 〃 ）

・ 直井雅尚（ 〃 、 〃 ）

・ 小林秀行（ 〃 、 〃 ）

・ 青木和明（ 〃 、 明大学生）

整理調査員 赤羽史子・奈須野由美・青木一男・田中正次郎

3 事務局

事務局長 関口 仁（社会教育課長）

担当職員 相沢金治（ 〃 課長補佐）

・ 吉池弘忠（ 〃 文化財係長）

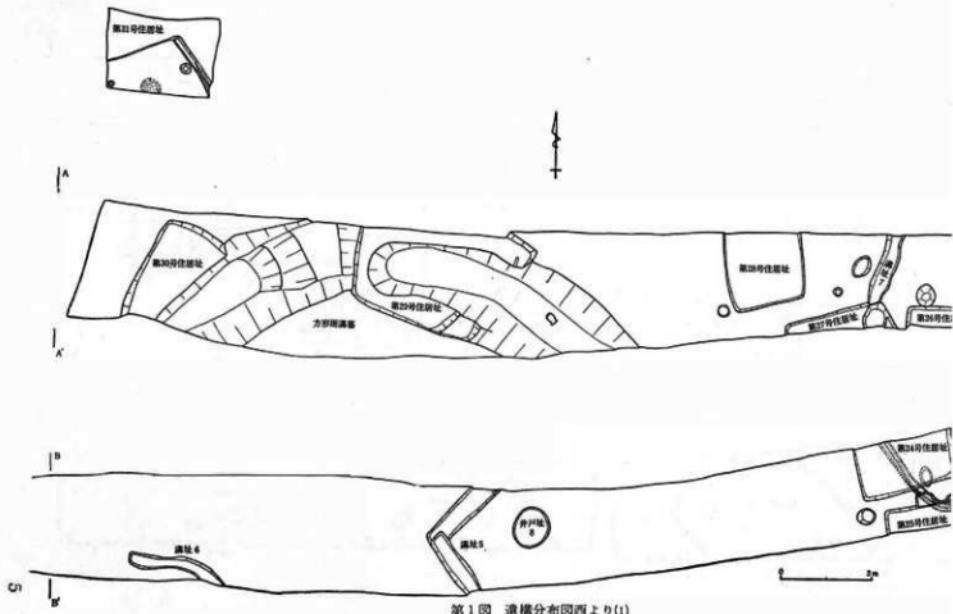
・ 矢口忠良（ 〃 、 主事）

・補助 竹内恵子

第4節 調査協力者一覧

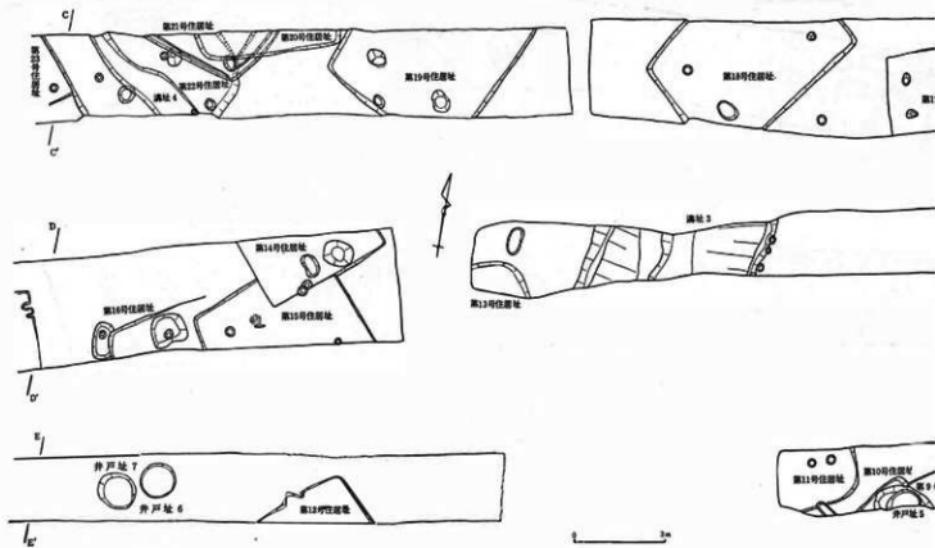
北沢正広・宮岡真一・大谷俊彦・深沢伊喜栄・宮崎保雄・矢島憲之・北村秀一・山岸義久・
北村政春・矢島善治・小林豊子・田中信子・伊藤忠治・兼山徳二・沓掛正男・鰐口太一・矢島
誠・矢島忠恒・北沢やすい・広瀬政子・小出正江・石川政男・三宅悦子・矢島喜和子・小出う
た子・中侯まさ子・三宅清・坂口礼子・北沢幸子・沓掛満子・三宅秀子・三宅けさみ・太田豊
一・北村文子・見崎とみ子・山田貞子・祢津悦子・駒村満・駒村より子・百瀬京子・北村博・
高崎音和・近藤正

直接参加された方々の他、塩崎区長会長中村団三さんはじめ各区長さん、鰐口太一さんをは
じめとする土地所有者の皆さんには種々御援助をいただいた。記して感謝の意を表します。

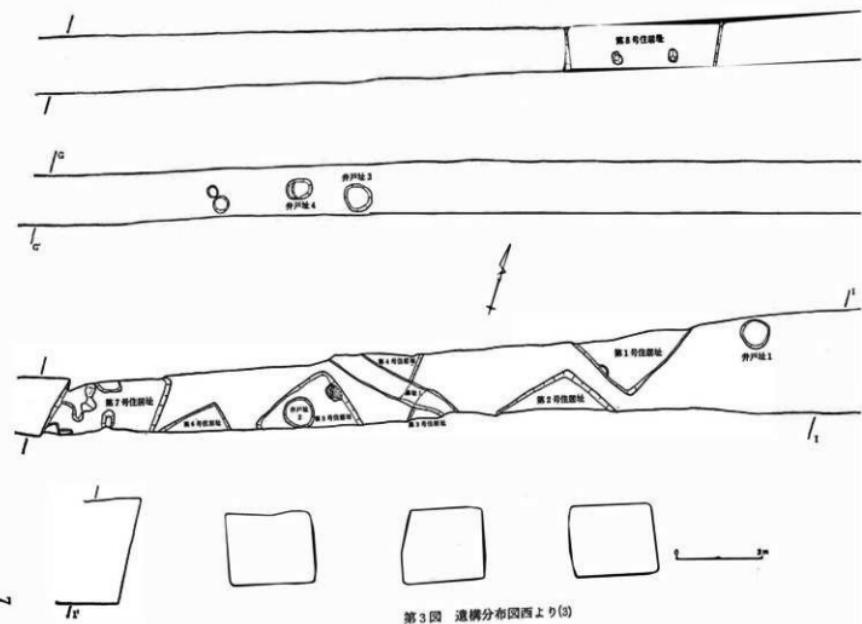


第1図 造構分布図西より(1)

G



第2図 遺構分布図西より(2)



第3図 造構分布図西より(3)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

上小地方より蛇行しながら北流してきた千曲川は、本調査地東側で犀川の影響を受け東に押しやられ、大きく屈曲し松代方面に流路をとる。またこの千曲川は上小地方で河岸段丘を形成してきたのにたいし、現在の坂城・上山田町付近から沖積地を形成するようになり、更に下流の細荷山から河岸段丘及び突出した山系先端を削りとった土砂の堆積と東西山系間が開けるにしたがい数条の旧流路より左右岸に狭長な自然堤防をつくり出すのである。この自然堤防は千曲川沿いに限られるものの犀川の堆積がより弱い地域のみに残存し、本遺跡がのる千曲川左岸をみれば篠ノ井横田地籍まで認められ、更に下流の柳原地籍に一部みられるだけである。その最も発達しているところが本調査地を中心とする塩崎・横田地籍である。この自然堤防は微高地になっており、水田の用に供されなく、現在では西端を走る県道篠ノ井細荷山線にそって宅地化され、それより東側は桃・クルミ等の果樹園・畑地として地目利用されている。このような微高地になっているため度重なる千曲川の水害にもそれ程の被害を受けなかったと考えられ、また日当たりも良いので古代より絶好の生活適地と考えられる。更にこの自然堤防の千曲川に対して背後には稻作生産と洪水からの緩和剤として好条件を有する千曲川の旧流路が残した広大な湿地が展開し、生産地と直接結びついた地でもある。

この地形的に本遺跡に重要なかかわりを有す要素に聖川とこれが開削した谷筋の道がある。聖川は信田の山間地に狭い沖積地を形成しながら落差をもって沖積地に注ぎ込む。現在この聖川は後背湿地及び自然堤防を横断する形で千曲川に至り、後背湿地では天井川になっている。この流路は記録的には慶長年間以来たびたびの改修をうけ現在の水路となっているようであるが、古代においては自然堤防の背後を流れ、横田あたりで千曲川に注ぎ込むとの流路が考えられ、これがまた水を必要とした地籍の灌漑用に役立ったものと思われる。しかし水田からの生産を上げるために、その後湿田から乾田への移行の中で、悪水とも呼ばれるようになり聖川の流路変更及び篠ノ井横田東側にある払堰開削の必要があったのである。

さてこのような環境にある本遺跡を見るに篠ノ井遺跡群と呼称しているが、先に述べた通り、千曲川左岸自然堤防上の一連の遺跡群である。ただあまりにも広範囲にわたるので、便宜上、更埴市境から聖川までを塩崎遺跡群、そこから払堰までを篠ノ井遺跡群、その東を横田遺跡群に分けているにすぎない。このうち篠ノ井遺跡群は東西約2km・南北500mで、千曲川の流路にそってわずかに屈曲する形になる標高差のほとんどない平坦な地形になる。標高は356

～54mの範囲にあり後背地の比高差は1.5mに満たない。現在の集落は西より平久保・上篠ノ井・東篠ノ井になっており、今回調査した地点は平久保の南端近くにあたり、堤防を越して向こうは聖川が流れまた千曲川の河川敷が展開する。ここは自然堤防上と若干堆積土に相違をみせ、粘土質に対して砂質になり、その地目は長芋等の根菜類を主とする畠地になる。また今回調査しなかった朝良根古神社西側は千曲川の屈曲部にあたり、決壊地等の埋立地である。

第2節 歴史的環境

この地は大塔の戦・篠ノ井氏居館址・郡庁址をはじめとし古代以来歴史事象を多く残していることなど周知のことであると思うので、ここでは本遺跡群をめぐる考古学的環境を瞥見してみたい。

本遺跡群は古くより弥生時代以降の遺物が出土していることで著名であり、長野市において近頃では遺物が多量に表面採集できる数少ない遺跡の一つになっている。こと程さうにその量の多さ及び散布面積が広いことから大集落が予想されている。また後背湿地の生産力は後に条里状に整備され、その遺構をいまだ地中に埋めているもの他の地域に比べ高かったことが推察される。先年調査した塩崎遺跡群塩崎小学校地点の調査ではどこを掘っても遺構にあたるという密集度を示していた。ちなみにこの調査で、弥生中期にさかのぼる方形周溝基が発見されたり、またこの遺跡群中に善光寺平に位置づいた弥生時代波及期の伊勢宮遺跡があり、銅鋅・同模造品と推定されている青銅器が出土した松節遺跡等重要な遺跡がある。山麓部・中洲の弥生時代の遺跡には、四の宮遺跡が知られており、山麓部より突出した小丘陵状の微高地上にあり、農道の断面に住居址が露出している。箱清水式期のものである。石川地区でも若干認められるがその範囲は不明である。これ以降古墳等の構築が後背湿地をとりまくように行なわれるようになる。その著名なものに国指定史跡の川柳将軍塚古墳・姫塚古墳がある。川柳将軍塚古墳は規模及び出土品で東国でも屈指の前方後円墳で南の山頂に対峙する森将軍塚古墳とともに5世紀初頭に位置するものと考えられており善光寺平古墳の初源である。また姫塚古墳及び近くの信更町田ノロにある大塚古墳は前方後方墳で特異な存在のし方を示して、自然堤防上の集落を考察する上で重要な鍵をなぎっていると考えられる。これらの古墳に若干時間が遅れて出現するものに中郷神社前方後円墳がある。この古墳は善光寺平に10数基ある前方後円(方)墳中最も低位置にあり山麓緩斜面上にある点、後期古墳を理解する上で重要な位置にあるように思える。^{主1}後期古墳は数が増え上石川を中心に石川古墳群があり、このうち市指定史跡池の上古墳。^{主2}同刻画を有する圓内(丸山第4号墳)古墳があり、見林長谷地区を中心とする四之宮古墳群がある。この他信更地区に瓦・須恵器を生産する信更古窯址群があるものの下石川にはトンネル(地下)式構造をもつ湯の入窯址があり、更に上石川の布施神社横の果樹園から布目瓦が出土しており上石川庵寺址が予想されている。このように自然堤防・後背湿地及び山稜(麓)とのかかわりの中で一つの歴史的空間を創っているようで、あらゆる時期またあらゆる種類を内包し



第4図 主要遺跡分布図及び調査地

1. 離ノ井遺跡群（調査地）
2. 堀崎遺跡群
3. 横田遺跡群
4. 西ノ宮遺跡
5. 石川遺跡群
6. 川柳浮城塚古墳
7. 毘様古墳
8. 石川古墳群
9. 中郷神社前方後円墳
10. 四之宮古墳群
11. 游ノ入窓址
12. 上石川廃寺址・宮下遺跡
13. 石川条里遺跡

ており時間的空間においても重要な地域であり、典型的あり方を示しているといえよう。

また今回調査対象になった地籍の字名をみると五輪・堀の内があり、五輪には室町時代にさかのぼると思われる五輪塔・宝篋印塔があり、堀の内の地名から櫻ノ井氏の居館址を裏付ける一つの傍証であろう。祠良根古神社の社名も気になる問題の一つである。帰化人を意味しているのか、又はそれらの人達がもたらした鍛冶技術等の生産的内容を意味しているのか考古学的調査がまたれる。

注1

石川古墳群 宮下古墳群2基・大田和古墳群3基・板橋古墳・鏡坂古墳群5基・虚空蔵平古墳3基
丸山古墳4基・池の上古墳等

注2

四之宮古墳群 八ツ塚古墳群・四之宮将軍山古墳・薬師山古墳3基・小日向古墳・大伯母古墳・秋葉山古墳・平古墳ノ八幡古墳等

参考文献

塩崎村誌刊行会『塩崎村誌』昭和46年

長野市教育委員会『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の調査第一第2次調査報告』昭和52・53年
森本六圓『川柳将軍塚の研究』川柳将軍塚古墳保存会 昭和52年復刊

長野市教育委員会『長野市の文化財』昭和54年改訂

更級埴科地方誌刊行会『更級・埴科地方誌』第1巻 昭和53年



何時甕と森鶴團長（堤佑四郎氏蔵）

この甕の出土伝説がおもしろいので紹介しよう。堤氏の先祖が今回調査した五輪地籍から深耕の際偶然発見したもので、これを振り出した際彼の中から「今何時じゃ。」という声がかかったという。驚いて○○と答えた。そうすると「まだワンが出る時ではない」といったそうで、この名前がついている。○○はその発見の江戸 明治ともいわれており、時刻を答えたというよりも森家の年号を答えた説が有力である。

須恵器の大甕で全面に印が残る。森鶴團長と比べその大きさがわかるというものの、団長は藏骨器の外容器でないと推定している。

第3章 遺構と遺物

第1節 住居址

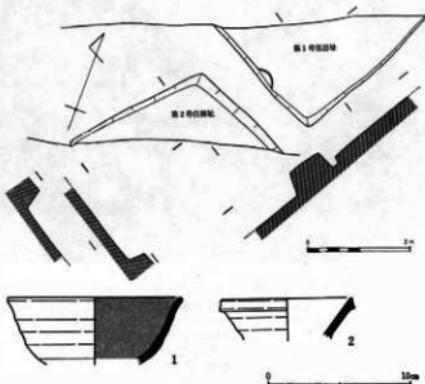
本調査で弥生時代から平安時代にかけての住居址を計31軒確認することができたが、調査地の制約から全形を露呈することができなかった。住居址番号は調査時では検出順に付したが、整理の手順で煩雑になったので調査地東側から順次付しなおした。

遺構確認面は黄褐色粘質土で、覆土は黒褐色粘質土を基本とするが第8号住居址より東側は砂の混入が多くなり、東端近くでは砂質に近い土層になる。

1. 第1号住居址（第5図、第2・3図版）

遺構 東壁・南壁の一部を確認したのみであるが、プランは方形になるものと思われる。規模は不明である。東壁の軸はN-20°-Wを指す。掘り込みは直に近く、各壁下28cmを測る。床面は平坦で軟弱である。南壁下に半円形のピットを確認したほか、他の施設はなかった。

遺物 図示できるものはなかったが器種として土師器壺形土器及び内黒で、糸切り底を有す



第5図 第1・2号住居址実測図、第2号住居址出土土器

る壺形土器が出土している。

2. 第2号住居址（第5図、第2・3図版）

遺構 第1号住居址に近接しており、西壁北壁の一部を確認したのみである。プランは西壁に比して北壁が外開するが、基本的には方形になるものと思われる。規模は西壁から2.95m内外になる。西壁の軸はN=40°-Wを指す。掘り込みは直に近く、西壁で40.5cm・北壁で44cmを測る。床面は軟弱で平坦である。

遺物 土師器壺形土器・壺形土器片が数点出土しているにすぎなく、壺形土器体部にはロクロ成形痕が明瞭に残る。

3. 第3号住居址（第6図、第3図版）

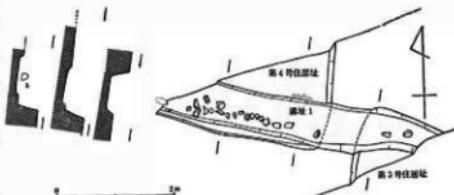
遺構 第2・4号住居

址とほぼ同方向に主軸を

とる隅丸方形プランにな
ると思われるが、北壁は
溝址1により破壊され、
また調査で北西隅の一部
を検出したのみである。

西壁の掘り込みは19cm
である。

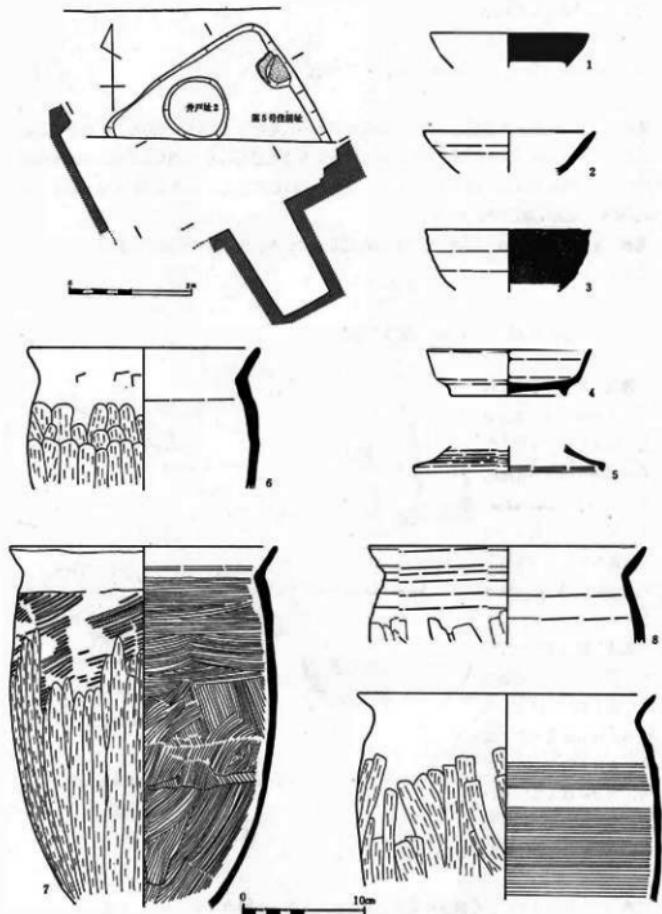
遺物 出土遺物量は少
なく覆土中から土師器壺
・壺形土器片が出土して
いる。両者ともロクロ成
形によるもので、ロクロ
目が明瞭に残っている。



第6図 第3・4号住居址・溝址1、第3号住居址出土土器

4. 第4号住居址（第6図、第3図版）

遺構 やはり溝址1により南壁付近が破壊され、東壁・南壁の一部を検出したにすぎない。プランは隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは直に近く、東壁で35cm・南壁で39cmを測る。床面は軟弱で平坦である。東壁下に焼土塊が認められたが床面より25cm浮いており、本遺構と関係あるのか不明である。他の施設はない。



第7図 第5号居住址・井戸2実測図、同居住址出土土器

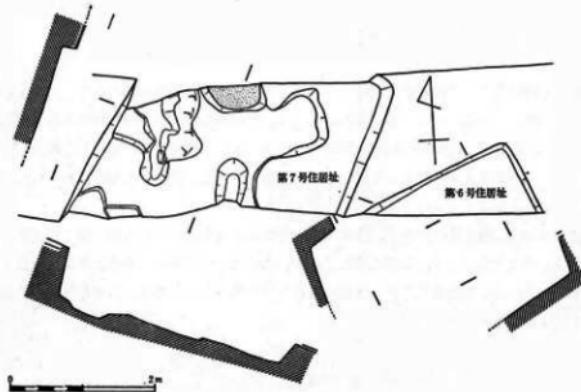
遺物 土師器要形土器片数点が出土しているにすぎない。この土器の体部はタテヘラケズリされ器肉を薄くしている。

5. 第5号住居址（第7図、第4図版）

遺構 井戸址2より古い住居址で北壁全部と東壁の一部のみ検出し、プランは一辺3.1m前後の隅丸方形になるものと思われる。掘り込みは直で東壁で38cm・北壁で34cmを測り、床面は東及び南に傾斜を有し軟弱である。東壁北よりに焼土が浮いた状態で残存しており、これをカマドの残灰とみれば、主軸方向はN-62°-Eである。

遺物 周辺住居址に比べ出土量が多い。杯形土器には土師器と須恵器がある。前者は体部が直線的になり口縁部に至ると内側口縁部が外反するものがあり、内面黒色処理されるものが多い。底部は欠損するが糸切りによるものと思われる。後者は1点焼土内より出土したもので、やや外開する高台が付され、体部は直線的で口縁部が外開する底部はヘラケズリが施される。要形土器はすべて土師器で口縁部がくの字に外開し、長胴になり、上から下へヘラケズリを施し器肉を薄くするとゆう手法になる。7の体部上半肩部に叩き目が、8の口縁部・肩部にロクロ目が残る。内面の整形はヘラ状工具によってなされ7・9にはカキ目が残る。共に最大径が体部上半にある。この他焼土中より口縁が嘴状になり端部が外反する須恵器蓋形土器が出土している。

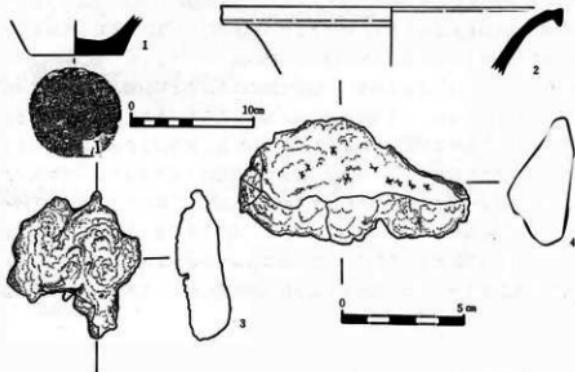
6. 第6号住居址（第8図、第4図版）



第8図 第6・7号住居址実測図

遺構 住居址北東隅の一部分を検出したにすぎないが、方形プランを呈すると思われる。掘り込みは直で、北壁下41cm・東壁下55cmをそれぞれはかり、床面は中央及び南に傾斜する。

遺物(1) 出土遺物は図示した1点にすぎない。小形變形土器の底部と思われる。底部に布目彫痕があり、本調査で検出した唯一のものである。周辺の遺構はすべて平安時代以降のものであり、またこの土器が弥生時代のものと想定されるので、この推定が正しければ混入と考えられる。



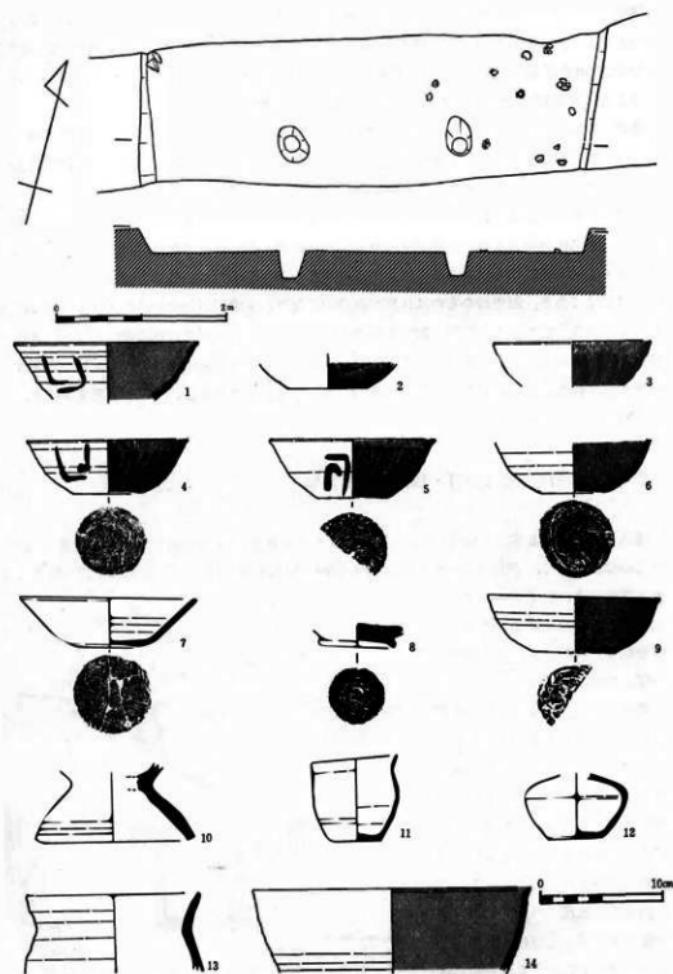
第9図 第6・7号住居址出土遺物

7. 第7号住居址（第8・9図、第5図版）

遺構 住居址北よりのほぼ中央部付近の調査で東壁・西壁の一部を検出した。プランは隅丸方形で、主軸がN-25°-Eを指す住居址になると思われるが、規模は不明である。壁はやや傾斜を有し、東壁下で37cm・西壁下で56cmを測る。床面は軟弱で西に傾斜し、複雑な落ち込みがある。カマドは北壁に付設されているものと思え、焼土が調査地北側に認められた。柱穴等施設はなかった。

遺物(2~4) 出土量は少なく、すべて覆土中からである。図示したのは須恵器變形土器で、口縁部が上部で立ち上がり、下部は垂れ下がる。この他土師器杯・變形土器片が出土しており、変形土器には内面が黒色処理され、底部に糸切り痕を残すものもある。この他鉄滓が2個出土したが質は悪いものである。

8. 第8号住居址（第10図、第5図版）



第10圖 第8号住居址実測図、出土遺物

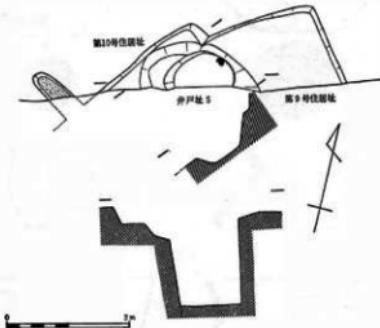
遺構 住居址中央の検出であるが、柱穴の位置からすれば南半分であろう。プランは方形になると思われ、東西の規模は断面線で5.29mを測る。掘り込みはやや傾斜を有し西壁で27cm・東壁で29cmの深さになる。柱穴は2個確認され、西壁沿いのものは長軸45cm・深さ32cm、東壁のものは長軸48cm・深さ26cmである。床面は平坦で軟弱である。

遺物 住居址東側から床面に密着して出土した。土師器壺形土器が多く、それに須恵器壺土器(7)・小形細口長頸壺(8)、土師器鉢形土器(9)、小形(10)・中形(11)壺形土器が混じる。土師器壺形土器はロクロによりつくられており底部に糸切り痕を残す。内面はよく研磨されており、3～5には放射状暗文がみられ、そのほとんどが黒色処理される。ただ2のみ底部がヘラにより整形され、8は外外面とも黒色処理がされ断面三角形の低い高台が付される。ここで注意されるのは1・4・5等にみられるように「い」状の墨書き土器が出土していることであり、本調査ではここだけである。須恵器のものは体部が直線的になり口縁端部がわずかに外反する。10は高台付壺になると思われる。鉢形土器は体部が内擷しながら立ち上がり口縁端部はわずかに外反する。胎土等から2と同一個体になる可能性がある。壺形土器はロクロ目が残り、11の底部はヘラナデされる。須恵器の壺形土器は頸部上方を欠き全形を知り得ない。扁平で肩部がはり、底部の調整はヘラ状工具による。

9. 第9号住居址（第11・12図、第6図版）

遺構 住居址の北半分を検出した。プランは隅丸方形を呈し、北壁の規模は21.5mを測る。掘り込みは直に近く、西壁で38cm・北壁で36.5cm・東壁で38cmを測る。床面は平坦で軟弱であり西壁近くに径40cmの焼土が認められた。南北軸はN-30°Wを指す。井戸址5により西壁の一部が破壊を受ける。

遺物 出土量は多くない。床面付近から壺形土器が出土した他は覆土中である。壺形土器には浅い椀形のものと断面三角形を呈し外開する高台が付される皿状のものがあり、これは内外面とも研磨され黒色処理される。この他土師器に内面黒色処理され、外表面はミガキ様のナデッケで整形され光沢を帯びる鉢形土器がある。器形は椀形で口縁部が外反し、底部は欠け



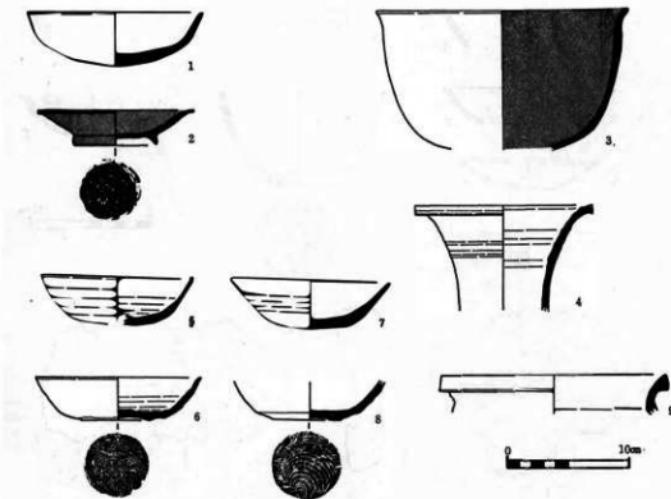
第11図 第9・10号住居址、井戸址5実測図

定かでないが、丸底になると思われる。須恵器では長頸壺の口縁部付近が出土している。ロクロ整形成痕を残し全体に自然釉がかかる。1は前時期のものであろう。

10. 第10号住居址（第11・12、第6図版）

遺構 第9号住居址より新しく、井戸址5により切られ、煙道は第11号住居址の西壁上に張り出す。検出は北東隅付近にすぎないが方形プランを呈するものと思われる。掘り込みはいくぶん傾斜を有し、北壁で26cm・東壁20cmの深さになる。床面は西に傾斜し軟弱である。カマドは北壁にもうけられ、調査では煙道のみ確認した。煙道は巾28cmの舟底状のもので底側面には焼土を残す。

遺物 井戸址との関係から後に混入したものがあると思うが、覆土から出土したものを本住居址出土遺物にあてる。环形土器には須恵器が多く、体部が内彌氣味で口縁部がわずかに外反する。体部はロクロ目が残り、底部にヘラ切離痕（5・7）と糸切り痕（6・8）を残すものがある。8には十字の火だすきがある。図示した変形土器も須恵器であるが、土師器の体部付近の破片も出土している。

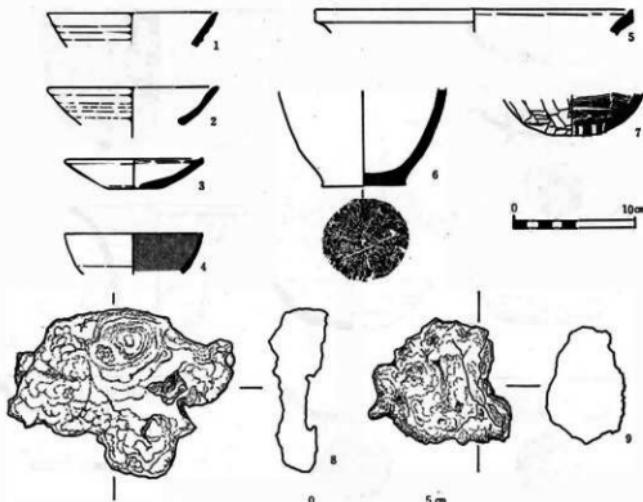
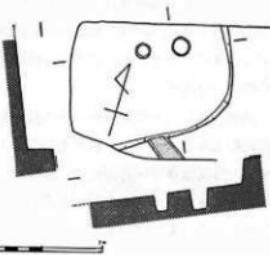


第12図 第9・10号住居址出土土器

11. 第11号住居址（第13図、第6図版）

遺構 第10号住居址の煙道が本住居址の南壁を覆う。南東隅の部分検出であるが、プランは隅九方形を呈するものと思われる。掘り込みは直に近く、東壁で41.5cm・南壁で39.5cmを測る。床面は堅緻で平坦である。柱穴は2個あるが、東壁沿いのものが主柱穴であろう。主柱穴は径32cm・深さ29cmである。

遺物 全て覆土中からの出土で、その量は多くない。坏形土器には土師器、須恵器があり、須恵器のそれにはロクロ成形痕が頗著に残る。土師器には皿形のものと碗形のものがある。底部は欠き定かでないが糸切り痕をもつものと思われる。5は須恵器の口縁端部付近の破片で、粗い波状文がある。6は變形土器の底部でX印の刻文が残る。7は多孔の瓶形土器であるが、たぶんまぎれ込みであろう。この他覆土中より鉄滓が2点出土した。

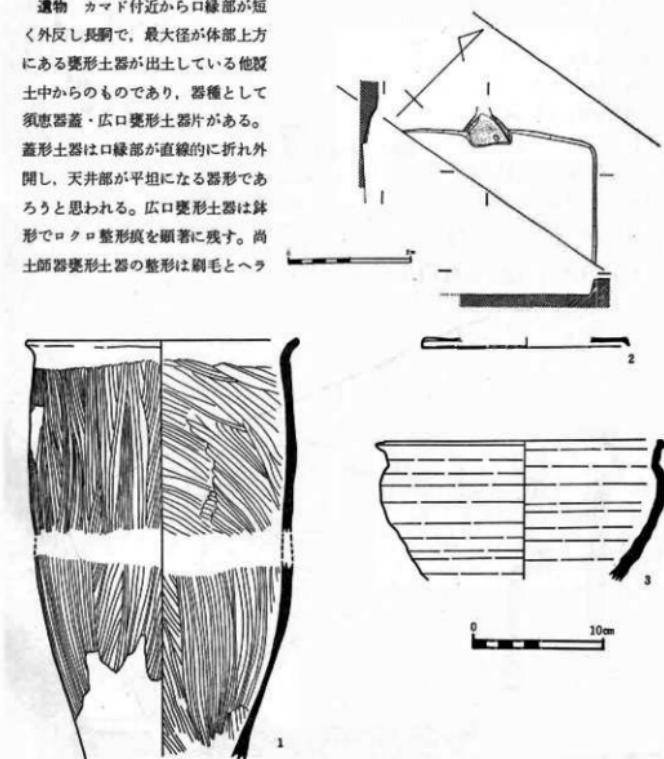


第13図 第11号住居址実測図、出土遺物

12. 第12号住居址（第14図、第7図版）

遺構 北壁及び東壁の一部を検出した住居址で、南半分は堤防下にある。プランは隅丸方形を呈し、カマドの位置から3.5m前後の規模になるものと思われる。主軸方向はN—43°—Wを指す。掘り込みは直に近く、北壁で27cm・東壁で29cmを測る。床面は平坦で軟弱である。カマドは北壁中央に設けられ、いくぶん壁外に張り出す。焚口部は破壊されており床面との差は8cmある。

遺物 カマド付近から口縁部が短く外反し長胴で、最大径が体部上方にある變形土器が出土している他甕土中からのものであり、器種として須恵器蓋・広口變形土器片がある。蓋形土器は口縁部が直線的に折れ外開し、天井部が平坦になる器形であろうと思われる。広口變形土器は跡形でロクロ整形痕を顕著に残す。尚土師器變形土器の整形は刷毛とヘラ



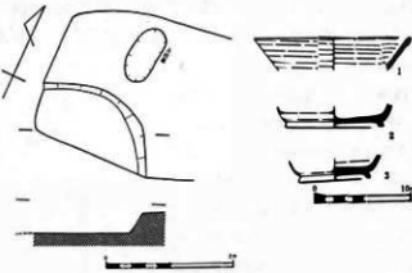
第14図 第12号住居址実測図、出土土器

によって行なわれ、外面にはカキ目、内面にはヘラ擦痕を残し、外面の一部には水滝粘土で再調整される点注意される。

13. 第13号住居址（第15図、第7図版）

遺構 北東隅付近のみの検出である。プランは隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みはやや傾斜があり、深さ37cmを測る。

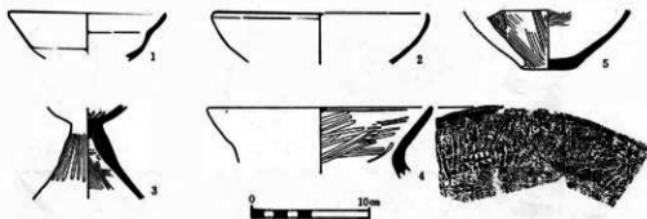
遺物 出土量は少なく、すべて覆土中からの出土である。器形を知りうるものは図示した須恵器壺形土器に限られるが、土師器壺・甕形土器片もある。1は体部が直線的



第15図 第13号住居址実測図、出土土器

で口縁部が肥厚し、2・3には高台が付され、底部整形はヘラケズリである。

14. 第14号住居址（第16・17図、第7図版）



第17図 第14号住居址出土土器

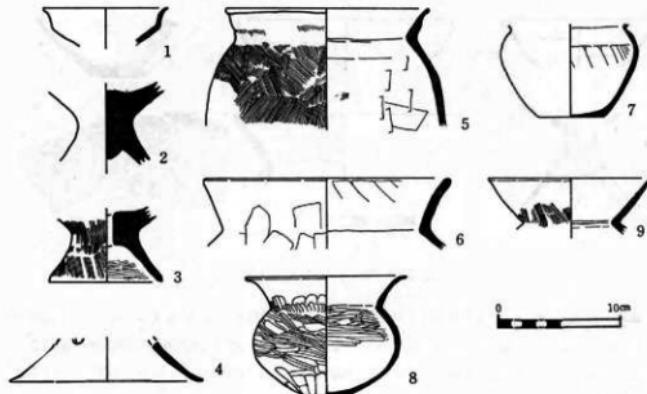
遺構 住居址南側の一部を検出したが、南西隅は第15号住居址と重複する。プランは方形を呈し、南壁の規模は4.25mである。掘り込みは東壁で15cm・南壁で12cm・西壁20cmを測る。床面は白黄色の粘土がはられ堅緻であるが、西に傾斜する。柱穴等なかったが南壁下に径1m深さ37cmの大きなビットを有する。

遺物 出土量は少ないが、すべて床面付近からの出土である。器種にはカブト形で体部・口縁部が内彎しその接続的に稜を有する壺形土器、体部が内彎し口縁部が更に内屈する浅鉢形土器、ラッパ状の脚部を有し、壺部が欠損して定かでないが器台と思われる器種及び口縁部が大きく外開し、ヘラ・刷毛による整形が施された変形土器がある。

15. 第15号住居址（第16・18図、第7図版）

遺構 第14・16号住居址を切る住居址で、北半分を検出した。プランは隅丸方形を呈し、北壁が4.7mを測る規模になる。掘り込みは直に近く、東壁は13.5cm・北壁30cm・西壁24cmを測り、北西に傾斜する床面になる。主柱穴は径30cmのものを3個確認したが、四本方形配列になるものと思われる。この他北東隅及び北壁下に長軸80cm程の楕円形のビットがある。炉は枕石を有し北壁よりの柱穴間にあるが、西によっている。この炉を中心にして床面は白黄色粘土が貼られ堅緻になり、その上部に炭化物の堆積が著しかった。この他東壁下南よりも炭化物の集中ヶ所があった。

遺物 出土量は比較的多い。7～9が床面直上で他の覆土から出土した。1は壺形土器か器台形土器の壺部か不明である。底部が丸底になるようで口縁部は直立後外反する器形になる。2は高壺形土器の脚部付近の破片で、3・4は器台形土器の脚部である。3は壺底部から1孔が穿たれ刷毛による整形痕が残り、4はラッパ状に開き3個の円孔があけられるようである。変形土器には大小あり、小形の7は調査時には口縁部まであったが、その後紛失してしまって示できないが、口縁部が直立的に立ち下方に鋭い稜を有する有段口縁をなすもので、全体的には茶壺という感じの器形になる。大形のものは口縁部がくの字形に屈開し、刷毛・ヘラ状工具

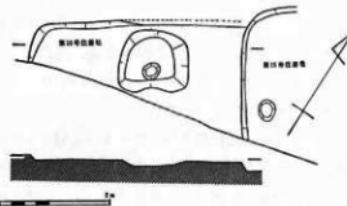


第18図 第15号住居址出土土器

により整形される。ただ5の口縁部中位はやや肥厚し有段口縁状になる。体部は球形を呈し最大径は体部中位にあるものと思われる。壺形土器は2点(8・9)出土しており、9は頸部がくの字状になり口縁部が内擣気味に立ち上がる器形になる。8は扁平な体部に外開する口縁部が付き端部は更に外反する器形になる。整形はヘラナデッケが施こされ、底部は平底でこことこれ付近はヘラケズリ様になる。

16. 第16号住居址（第19・20図）

遺構 第15号住居址に東壁が切られ、また北壁沿いの一部しか検出できなかった住居址である。確認面での掘り込みは浅く、4cm内外である。床面は平坦で軟弱であるが、後出の東西1.15m・深さ17cmのピットにより一部破壊される。このピットより東南は炭化物の堆積が著しく、南端に焼土を確認した。



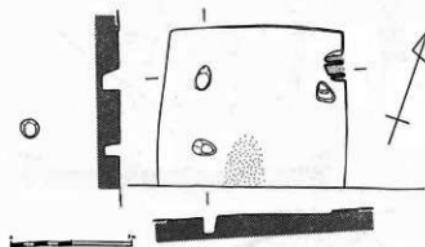
第19図 第16号住居址実測図

遺物 出土量は10点に満たない。すべて破片で割合に波長の短かい波状文で飾られる變形土器と頸部に櫛状工具による櫛描平行条線文とその下部に鋸歯文内に斜行条線文を入れる文様で飾られる壺形土器がある。



第20図 第16号住居址出土土器拓影

17. 第17号住居址（第21図、第10図版）



第21図 第17号住居址実測図

遺構 焼土と堅紙な床面から判断した住居址で、南側一部が堤防下に延びているものと思えるが、断面から掘り込み等確認できなかった。プランは方形を呈し北東隅近くの東壁にカマドを有する住居址で、北壁の規模は2.8mである。床面は北側で堅くしまっており、南側は軟弱になる。

柱穴は3個であるが、不規則

である。カマドはすでに破壊をうけており火床のみ残存する。この他南側で焼土の散布がみられ他の遺構と重複している可能性があるが明確にできなかった。

遺物 床面がすでに露呈してしまったのでこの住居址に伴う積極的遺物はなかったが、カマド周辺からロクロ整形痕を有する変形土器片が3点出土した。

18. 第18号住居址（第22図、第10図版）

遺構 北西隅・南東隅が未検出であるが、本調査で全体のプランを的確に確認できた住居址の一つである。主軸はN-34°-Eを指し、規模が主軸6.0m・短軸4.4mの隅丸長方形を呈すプランになる。壁はやや傾斜を有し23cmを測る。柱穴は3個確認されて、方形配列4本柱になると思われる。床面は平坦で非常に良く固められているが、これは柱穴間内に限られる。炉（カマド）は確認できなかったが、東壁中央付近に炭化物の集中ヶ所があった。覆土中から円礫・角礫が多量に認められ、そのほとんどが床面に近く南東よりに集中する。

遺物 南東よりの集石中から床面に接して変形土器が逆位で、その近くから獸骨が出土しており、また北側から変形土器を得た。変形土器は不整形で底部に丸味があり、体部は内彎しな

がら立ち上がり、口縁端部はやや外反する。底部に円孔があけられ周囲はヘラにより整形される。變形土器は球形に近い体部になるものと思え、口縁部は立ち上がり気味に外開した後端部で更に外反する。焼成は良く、ヘラ状工具によりミガキ様に整形され光沢を帯びる。この他覆土中より天井部から口縁部が直線的で、端部は器内が漸減しながらそのままおさまる須恵器蓋形土器が出土している。

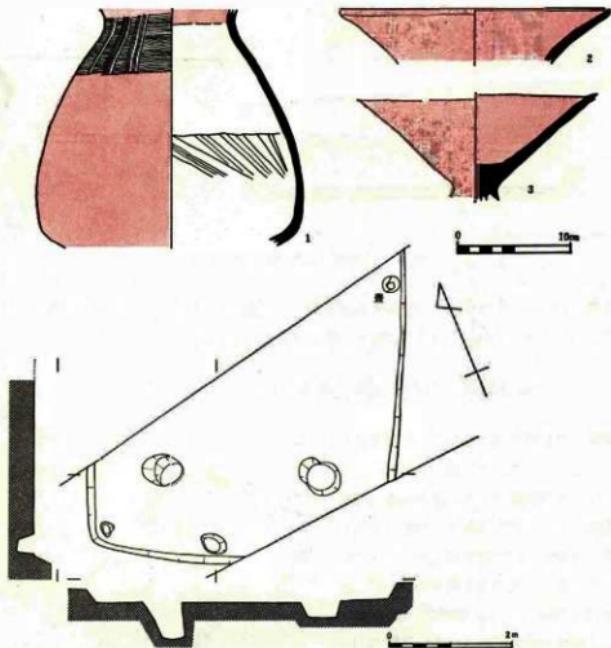


第22図 第18号住居址実測図、出土遺物

19. 第19号住居址（第23図、第8図版）

遺構 南東隅及び北側半分は調査地外にある住居址で、隅九方形プランを呈するものと思われる。掘り込みは傾斜をもち東壁30cm・南壁26cm・西壁27cmの深さになる。主柱穴は2個検出し更に南壁下に2個の小さな支柱穴がある。主柱は4本柱方形配列と推定される。床面は白黄色粘土が貼られ堅くつき固められている。

遺物 出土量の割には図示できるものは3点にすぎない。1は東壁下覆土より出土したもので口縁部・体部下半を欠く。体部下半に最大径を有し、それ以下は急激にこける所謂無果花形

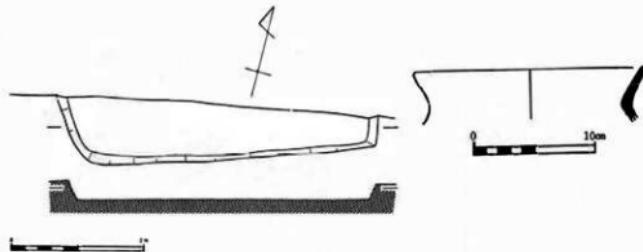


第23図 第19号住居址実測図、出土土器

になるものと思われる。文様は頸部に限られ 4 単位の平行櫛描文とそれを縦に切る同手法で飾られ T 字文になる。2 は壺形土器の口縁部付近の破片で端部がわずかに立ち上がる。3 は高壺形土器の壺部破片で、体部が直線的に立ち上がる浅鉢形になる。文様帯及び体部の内面を除く他はすべて赤色塗彩される。

20. 第20号住居址（第24図）

遺構 第21号住居址より新しい、南壁付近のみ検出した住居址で大部分は民有地に延びる。プランは隅丸方形を呈すると思われる。東西壁間は4.6mを測る。掘り込みはやや傾斜を有し、東壁22.5cm・西壁27cmを測り、床面は西にいくぶん傾斜し、軟弱である。柱穴等他の施設は確認できなかった。



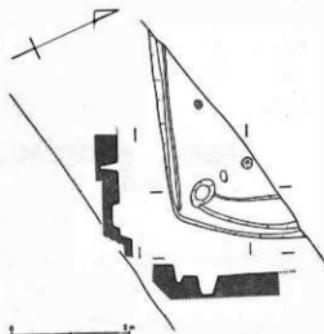
第24図 第20号住居実測図、出土土器

遺物 出土量は少なく図示できるものは變形土器1点にすぎない。それも頸部付近の破片である。頸部はゆるやかなくの字形になり口縁部が直線的になる。

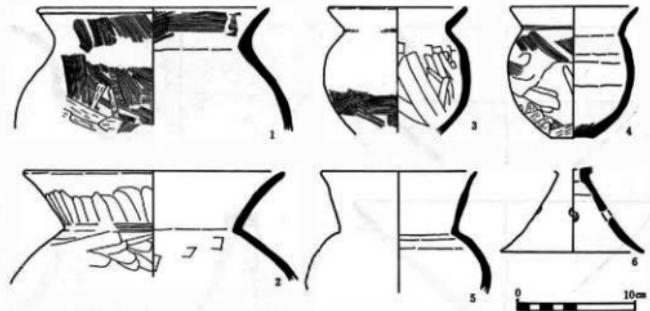
21. 第21号住居址（第25・26図、第8図版）

遺構 南東隅付近の検出で、第20号住居址より古く、第22号住居址より新しい。プランは隅丸方形を呈すると思われる。規模は不明である。掘り込みはやや傾斜を有し東壁で24cm・南壁で19cmを測る。柱穴はコーナー近くに1個あり長軸55cm・深さ32cmの梢円形を呈する。南壁直下巾10cm・深さ12cmの周溝があり、また東壁に沿って巾50cm前後・深さ9cmの溝があがぐ。

遺物 検出した範囲の割には出土遺物は多く見るべきものがある。器種には大小の甕・壺・器台形土器がある。坏形土器もあるが破片で図示できるものはなかった。變形土器は頸部がくの字形に折れ更に口縁部が外反し、球形洞に近い器形になるものと思われる。整形は内外面とも刷毛・ヘラ状工具によってなされ整形痕を残す。4は平底である他は欠損し不明である。増形土器は口縁部が急角度で立ち上がる球形洞で、内外面ヘラミガキが施こされ光沢がある。器台形土器は脚部のみで、ラッパ状に開き、坏底部から1孔が穿たれ、脚中位付近に4円孔があけられる。外面はヘラミガキされ、内面はヨコナデ整形である。



第25図 第21号住居址実測図

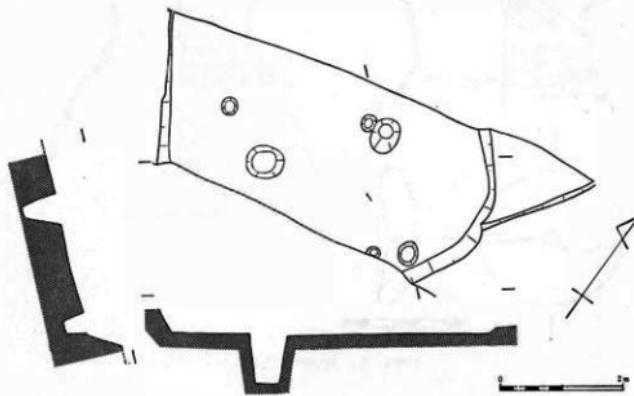


第26図 第21号住居址出土土器

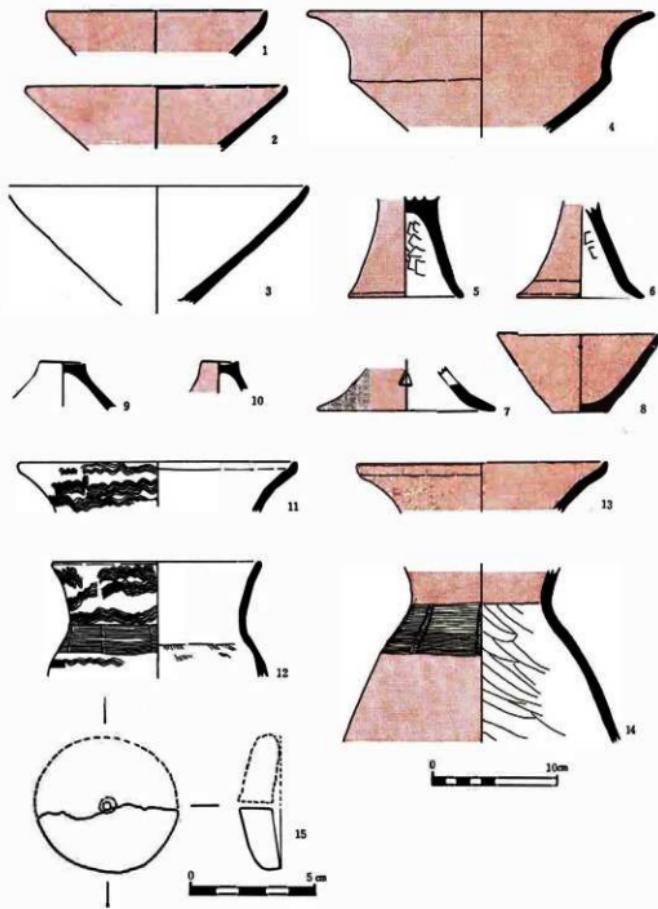
22. 第22号住居址（第27・28図、第9図版）

遺構 第20・21・23号住居址より古い住居址である。北半分及び南西隅付近は未検出である。プランは隅丸方形になると思われ、規模は不明である。掘り込みは南北で55cm・西壁で40cmを測る。主柱穴は2個あり、楕円形で長軸60cmと大きいもので、西壁沿いのものの深さが85cmを測る。床面は平坦であり、白黄色粘土が貼られ堅紙である。炉は確認できなかった。

遺物 覆土中からの出土が多くまたその出土量も多い。器種には高杯・蓋・浅鉢・壺・壺形



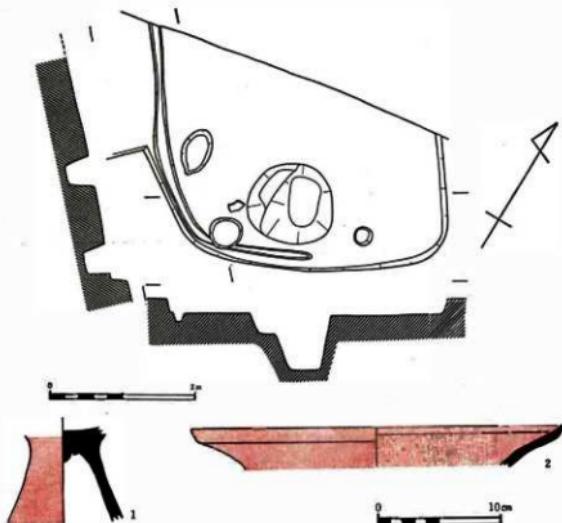
第27図 第22号住居址実測図



第28图 第22号住居址出土土器

土器がある。高杯形土器は2種あり、1～3のように体部がやや内彎気味になり、口縁部が立ち上がる浅鉢形のものと体部上端が段をなし、口縁部が立ち上がった後大きく外反する器形になるものとある。脚部は短かくラバ状になり、7には三角窓が4孔あけられる。これらは脚部内面を除き研磨され赤色塗彩される。蓋形土器はつまみ部付近が2点出土した。つまみ部は小さく上端はくぼむ。10の外面は赤色塗彩される。鉢形土器は底部が平底で体部から口縁部まで直線的になる。口縁部に小円孔が穿たれ、底部を除き赤色塗彩される。變形土器は口縁部が立ち上がり受け口になると頸部から素直に接続するものがあり、最大径は肩部にあるようである。文様は8本単位の櫛状工具による粗く波長の長い波状文が口縁部と体部に、肩部に廉状文が施される。壺形土器片も多く出土している。13の口縁部は受け口状になり頸部が外反気味になる器形で、14はこの部位を欠くが同様の器形になると思われる。また14は体部下半を欠く。肩部に廉状文が施される。内外面とも赤色塗彩されるが、体部内面は地のままである。この他土製紡錘形が1点出土している。上面は盛り上がり、下段も上げ底状になり、中央に1孔が穿たれる。

23. 第23号住居址（第29図、第9図版）



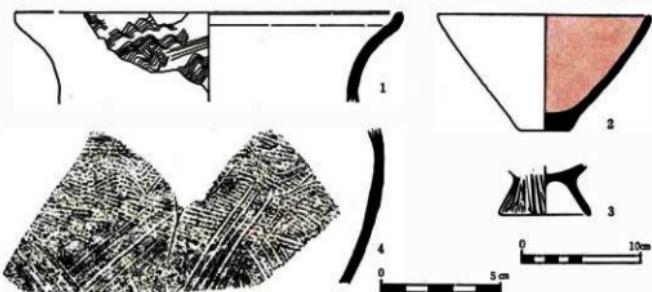
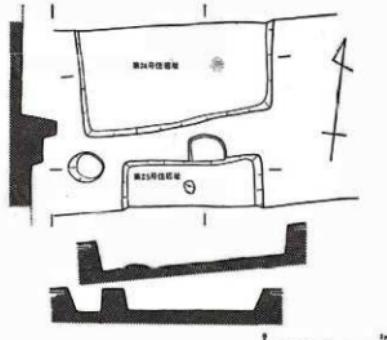
第29図 第23号住居址実測図、出土土器

遺構 第24・25号住居址の下部にあり、第22号住居址より上にある。南半分のみ検出した住居址で、やや胴張りの隅丸方形プランを呈するものと思われる。東西間の規模は4.1mである。掘り込みは直に近く、東壁19cm・南壁21cm・西壁18cmを測り、床面は平坦で白黄色粘土が貼られ堅緻である。主柱穴は定かでないが、西壁下に1個・南壁沿いに2個の柱穴を確認し、南北より中央に径1.1m・深さ73cm程の円形に近いプランを呈する落ち込みを検出したが意味するところは不明である。周溝は西壁から南壁下西半分までめぐらされる。巾10~20cm・深さ8cmのものである。炉はなかったが、南壁下東側柱穴に近接して焼土塊が残存していた。

遺物 出土量は少なく、図示できるものは外側が赤色塗彩される高杯形土器脚部片及び口縁部が短く立ち上がる菱形土器口縁部片のみである。これは内外面とも赤色塗彩される。

24. 第24号住居址（第30図、第11図版）

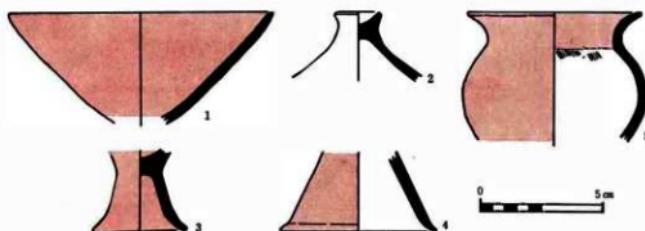
遺構 第23号住居址の上部を覆う。調査では南半分を検出した。プランは方形を呈し南北間の規模は3.16mである。掘り込みは直に近く、東壁50cm・南壁47cm・西壁45cmを測る。床面は平坦で軟弱であるが西壁近くに径60cm・高さ10cmのマウンド状遺構があり、周辺に炭化物が散布する。この床面には中央より東側に径25cmの範囲に焼土が認められた。柱穴等はない。



第30図 第24・25号住居址実測図、第24号住居址出土土器拓影

遺物 出土量は少なく、器種に壺・浅鉢・台付壺（？）及び壺・高壺形土器片等がある。図示できるものは前三者3点にすぎない。壺形土器は口縁部付近の破片で、口縁部は立ち上がり受け口状になる。施文は粗い不規則な波状文である。鉢形土器は平底で体部はやや内凹しながら口縁部にいたる器形になり、内外とも研磨され赤色塗彩されるが、内面の器面があれている。3は短かく外開する高台で、外面に暗文風みがき痕を残す高台付壺であろう。4・5は壺形土器片であり、4には櫛描波状文と斜行条線文で飾られ、5には波状文が施こされる。

25. 第25号住居址（第30・31図、第11図版）



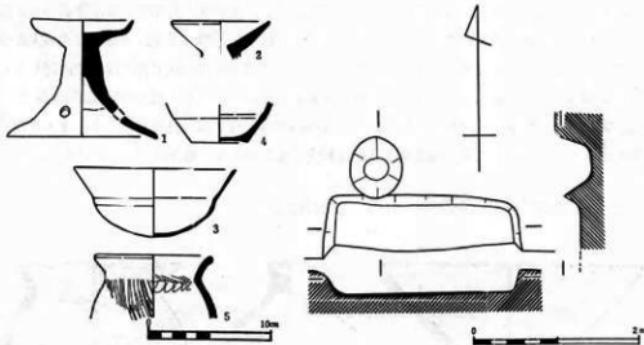
第31図 第25号住居址出土土器

遺構 第24号住居址の南側に位置し、北壁付近の一部を検出したにすぎない。プランは方形を呈し、南北間の規模は2.3mと小ぶりの住居址である。掘り込みは東壁28cm・北壁25cm・西壁27cmの壁高になる。床面は平坦で軟弱であり、床面に接して自然石が置かれていた。柱穴等はない。周辺に土壤状のビットが2つあるが本遺構とは関係ないようである。

遺物（1～5）すべて覆土内出土で、その量は多くない。図示した器種にはつまみ部の上面がくぼみ、体部が大きく聞く蓋形土器、体部がやや内凹しながら外開する高壺形土器壺部及びラッパ状になる同種脚部があり、体部が球形で、口縁部が頸部から直立したのち大きく外反する壺形土器がある。これらは蓋形土器・高壺形土器脚部内面・壺形土器体部内面をのぞき研磨され赤色塗彩が施こされる。尚壺形土器体部内面のヘラミガキ様ナデ整形痕の中に赤色顔料がぬりつけられており、焼成前に赤色塗彩されたことを示す資料である。この他器種として波状文で飾られる壺形土器、赤色塗彩される壺形土器がある。

26. 第26号住居址（第32図、第11図版）

遺構 北壁付近一部のみの検出である。プランは方形を呈するものと思われ、東西間の規模は2.35mである。掘り込みはやや傾斜を有し東壁25cm・北壁28cm・西壁28cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴等の遺構はない。この他北壁に接して長軸75cm・深さ44cmのビット



第32図 第26号住居址実測図、出土土器

トが接してあるが、本遺構と関係ないようである。

遺物 出土量は多くなく、そのほとんどが覆土からのものである。図示できる器種には器台形土器 2 点(1・2)・壺形土器 1 点(3)・壺形土器 2 点(4・5)にすぎない。1 は浅い皿状の壺部を有し、脚部は長くラババ状に外開し下部に 3 円孔が穿たれる。2 は 1 と同器形土器であるが、体部が直線的に開く器形になり底部中央に 1 孔があけられる。壺形土器は体部下が浅く丸底になり、口縁部との境に段をなし、口縁部はやや内凹気味に外開する。壺形土器は底部と器体上半の破片で、4 の底部は上げ底になり、5 は口縁部がくの字形に外開し、体部に最大径のある器形になる。整形は刷毛状工具による。

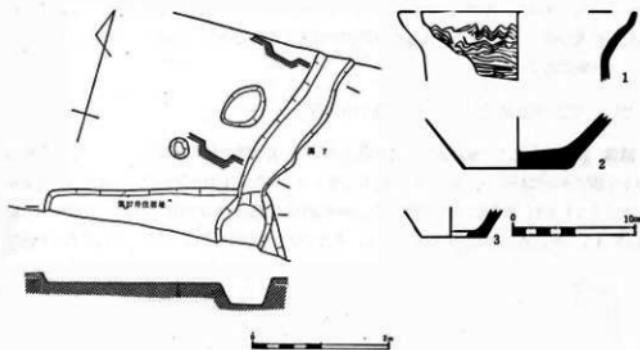
27. 第27号住居址（第33図、第12図版）

遺構 この住居址も北壁付近一部を検出したにすぎなく、北東隅は溝址 7 より破壊をうけた。プランは方形を呈するものと思われ、その規模は東西間をみると 3.3m を測る。掘り込みはやや傾斜を有しており、各壁で 8 cm を測る比較的浅い住居址である。床面は平坦で軟弱である。また北側にピット状の遺構があるが本住居址とは関係ないものである。

遺物 出土量は少なく、すべて覆土中からである。口縁部が立ち上がり、外面を粗い不規則な櫛描波状文・簾状文で飾られる壺形土器・壺形土器の底部破片、底部に 1 孔があけられる壺形土器がある。

28. 第28号住居址（第34図、第12図版）

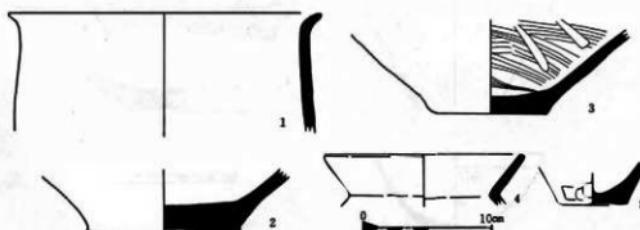
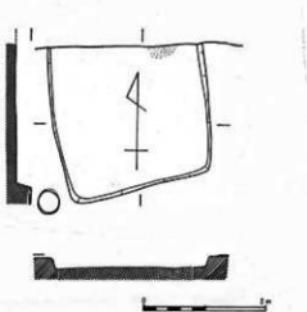
遺構 住居址南側の調査で、北へはそれ程延びていないと思われる。プランは隅丸方形であ



第33図 第27号住居址実測図、出土土器

るが、西壁は胴張り状になる。規模は東西間で2.5cmを測る。掘り込みはやや傾斜を有し、東壁22cm・南壁26cm・西壁19cmを測る。床面は平坦で軟弱であり、北側東壁よりに焼土が認められた他柱穴等の施設はない。

遺物 出土量は多くなく、すべて覆土中からのものである。器種は變形土器に限られ、1・4は口縁部付近の破片で、1は口縁部が

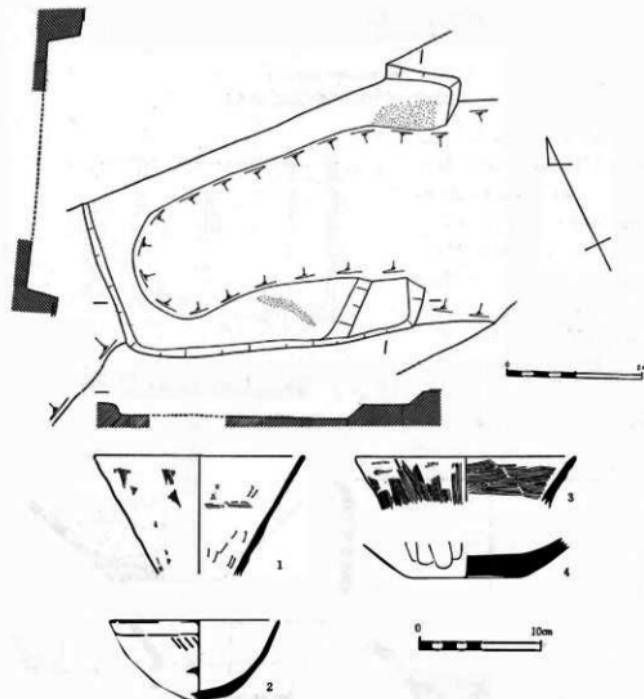


第34図 第28号住居址実測図、出土土器

短かく大きく外反し、体部は直線的になり、4は頸部からくの字形に外開し直線的である。他は底部付近の破片で、2・3は大形の球形胴の器形になるものと思われる。5は小形のもので底部が上げ底になる。

29. 第29号住居址（第35図、第14図版）

遺構 住居址中央は方形周溝基により破壊をうけ、北西隅は調査地外にある。プランは西壁がやや西に向っているが、基本的には隅丸方形プランになるものと思われる。規模は南壁よりの東西間で4.45m、東壁よりの南北間で3.9mを測る。掘り込みは傾斜を有し、北壁49cm・南壁52cmで、西壁は溝面より13cmを測る。床面は南東隅付近で約20cmの段になる他、平坦で



第35図 第29号住居址実測図。出土土器

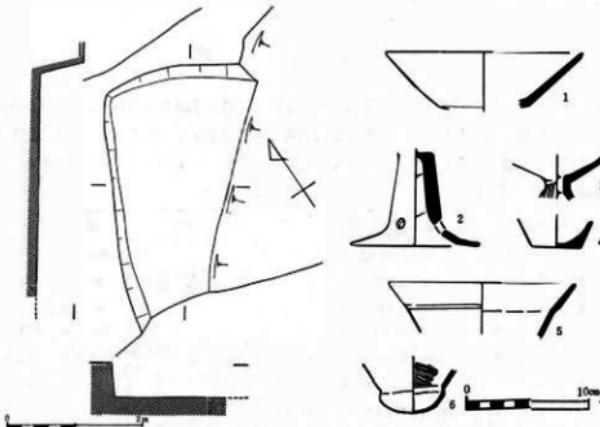
白黄色粘土が貼られ堅くつき固められている。焼土は南壁下中央付近と北東隅付近に認められた。柱穴等はなかった。

遺物 出土量は少なく、すべて床面直上である。1は口縁が直線的に外開する大形の壺形土器になると思われる口縁部のみの破片である。2は不整形で底部が小さな平底になる椀形の杯形土器で、3・4は変形土器の口縁部及び底部付近の破片である。これらの整形は刷毛とヘラ状工具によっている。

30. 第30号住居址（第36図、第14図版）

遺構 方形周溝墓により東半分が破壊され南壁は堤防下にある。プランは胴張りの隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは頬斜を有し、北・西壁で50cmと比較的深い。床面は平坦で軟弱であるが、北西隅付近の一部に白黄色粘土が貼られ堅紙な個所があった。検出遺構中央付近に焼土が認められ、位置から炉であろうと推定している。柱穴等はなかった。

遺物 出土量は多くない。1を除いては床面直上から出土した。1は高壺形土器壺部の破片で、体部が直線的に口縁端部まで至り下方の底部との境いに鈍い棱をなし、底部は平底状になる器形である。2も同様の器種の脚部であろう。上半は筒状になり裾部は大きく外開し、境あたりに3円孔がある。3は器台形土器の破片で、底部から脚部にかけ1孔が穿たれる。4は小形の変形土器の破片であろう。5は口縁部が有段をなす壺形土器になると思われるが頸部下を欠き全形を知り得ない。6は体部が浅く、口縁部が長く外開する小形丸底形土器である。整形は刷毛とヘラ状工具が主として用いられている。

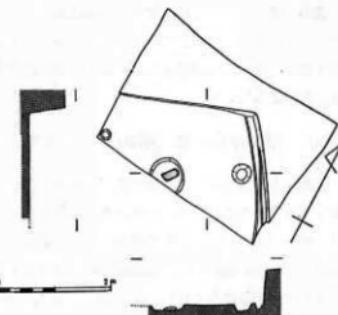


第36図 第30号住居址実測図、出土土器

31. 第31号住居址（第37図、第15図版）

遺構 調査地西端五輪地蔵からの検出である。プランは方形を呈するものと思えるが、北東隅付近のみの調査であったので何ともいえない。掘り込みは直で深く東壁64cm、北壁64cmを測る。床面は平坦でよくつき固められている。主柱穴は東壁沿いで径35cm・深さ9cmのものを1個確認した。炉は北壁沿いにあり、柱穴間に位置するものと思われる。径62cm・深さ10cmのピット状のもので、内に焼土塊を残す。炉周辺は炭化物の散布が著しい。周溝は東壁下に認められ、巾13cm、深さ4cm前後のものである。

遺物 出土量は少なく、すべて小破片で図示できるものはなかった。内外面とも赤色塗彩され、真直ぐにラッパ状に開く壺形土器、櫛描波文が施された變形土器それに高杯形土器の器種が確認できた。



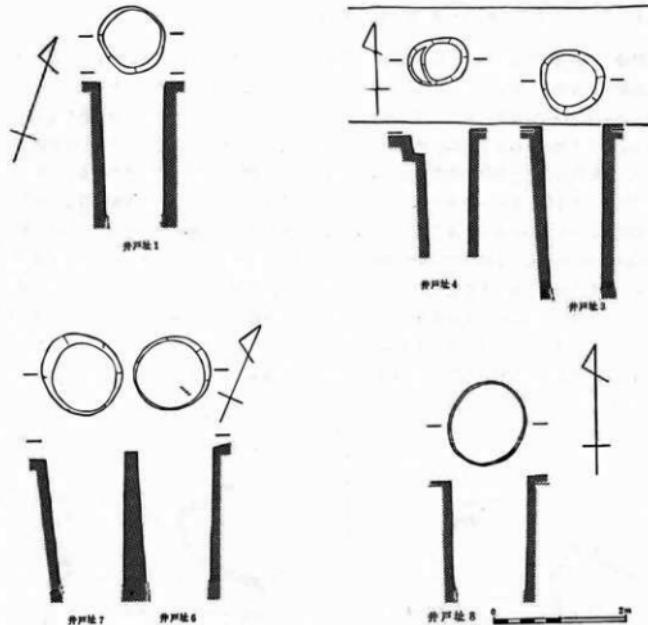
第37図 第31号住居址実測図

第2節 井戸址

円形を呈し、壁が直になり、底面付近に湧水を伴う遺構を本節であつかう。ただ4は掘り下げる事が困難だったので調査を断念した遺構で当然湧水面まで掘られているものと思う。また各遺構とも湧水により底面まで至っていない旨お断わりしておく。各遺構間の距離は東よ

表1 井戸址

番号	図番号	プラン	規模 (東西×南北×深さ)	壁	出土遺物	備考
1	38	円形	1.02×1.02×2.05	直		湧水
2	7	タ	1.05×1.05×2.03	タ	(土)内黒坏・甕 (須)坏・甕	タ
3	38	タ	0.97×0.98×2.50	タ		タ 覆土堅い
4	38	タ	0.72×0.71×(1.75)	タ		西にピットあり
5	11	タ	1.00×1.00×1.98	タ	(土)内黒坏・坏・甕 (須)坏・甕	
6	38	タ	1.15×1.13×2.02	タ	(土)内黒坏・甕 (須)甕	湧水外周落ち込み 有り
7	38	タ	1.25×1.20×2.02	タ		タ
8	38	タ	1.18×1.26×1.98	タ		タ



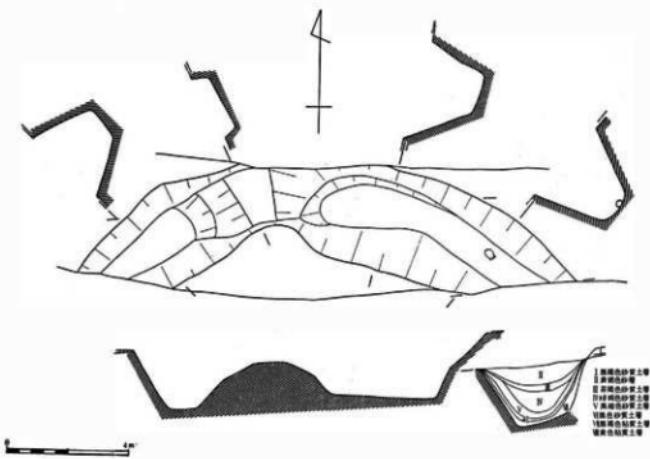
第38図 井戸址 1・3・4・6～8

り 1→2 で 16m・2→3 で 29m・3→4 で 1m・4→5 で 41.5m・5→6 で 23.5m・6→7 で 0.2m・7→8 で 遠く 79.8m を測り一定でなく、3・4 と 6・7 のように対をなし近接するものもある。規模は 4 の 70cm 代を最小にして、1m 代のものが多く、8 の 1.25m を最大とする。湧水地点は 3 を除いてほぼ一定しており遺構確認下 2m 前後になる。2・5・6 から出土遺物は土師器・須恵器の甕・杯形土器片、8 から球形胴の甕形土器・凹石等若干量出土しているにすぎない。時期については 2・5 が平安時代住居址との重複及び周辺から青磁片を得ていることから、中世に下る遺構の可能性がある。

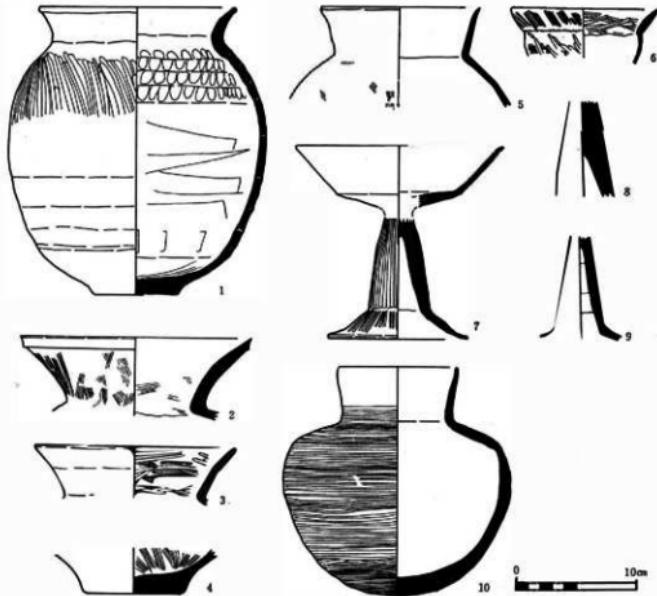
第3節 墓 址

1. 方形周溝墓（第39・40図、第17・18図版）

遺構 調査地西端近くに位置し、北溝の一部を検出した遺構で、大部分は堤防下にある。調査当初大きな溝を想定していたが調査を進めるに従い底面が序々に上昇し、北側で完全に上がりきって浅い溝になり、また断面を観察するに、水の流れた形跡がなかったので単なる溝ではなさそうだということで更に西側プランを追求したところ多くの字に折れ曲がり、方形周溝墓との見方を固めた。一部分の検出であるので、全体の形・規模・主体部等不明であるが、推定では隅丸でやや胴張りのもので各隅が山状に盛り上がるるものと思われ。その規模は溝の規模から相当大きなものが想定できる。西から溝の巾と深さを記すと、2.8m・97.5cm、山状陸橋部で2.2m・26cm、その下溝部で3.3m・99cm、東端付近で3m・107cmである。底面は平坦である。この溝を埋める土層の最上部は黄褐色砂層になり、千曲川の氾濫によるものと思われる他。その下層は4層にわたる砂質土になり下部に至って黄色粘質土の漸移層になる自然堆積の状態を示す。溝内側の堆積は遺構確認面上部に約23cmの厚さで黒褐色砂質土がのる。ちなみにこの遺構確認までの地表からの深さは1.35mを測り、前記したものよりやや明るい黒褐色砂質土層になる。



第39図 方形周溝墓実測図



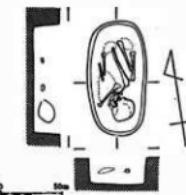
第40図 方形周溝墓出土土器

遺物 底面及びその附近からの出土遺物は1～6で、7～10は上層の黄褐色砂層下より出土したもので、この造構と直接関係ないものと思われる。1は口縁部が外反し端部を丸くおさめた球形状になり、平底になる器形で、外面はヘラナデツケで整形され内面上半に指頭圧痕が残る。両面とも輪積成形痕を残す。2・3は頸部がくの字形になり口縁部が大きく外反する口縁部になり、この端部外面は面取りされる。4は変形土器底部片である。5は口縁部が立ち上がり端部でわずかに外反する埴形土器である。6は口縁部が肥厚し外面は内凹的になる。体部は丸味をもち浅い器形の杯形土器である。以上が本造構に積極的に付属する。整形は刷毛を主にヘラ状工具による。上層からは直線的に外開し、下部に鈍い棱を部を有し(7)、筒状で幅部が大きく外開する脚部(7～9)の高杯形土器及び口縁部が立ち上がり更に端部で立ち上がり、肩部が張り丸底になる須恵器短頸壺が出土している。

2. 土墳墓（第41図、第19図版）

溝址3の大溝の西側から検出されたもので、表土除去地であったので掘り込み面は不明であ

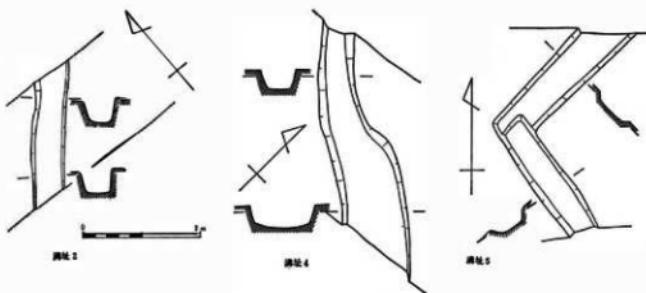
る。プランは(主軸N-9°-E) 93cm・短軸50cmの椭円形を呈する。確認した掘り込みは直で深さ22cmを測る。底面は平坦で、覆土は黒褐色粘質土である。この遺構長軸にそって人骨が埋葬されており、その状態は頭部を南にとる東向の横位屈葬である。時期は副葬品がないので明確にすることはできないが、遺構確認面は平安時代に比定されるもので、これ以降のものである。



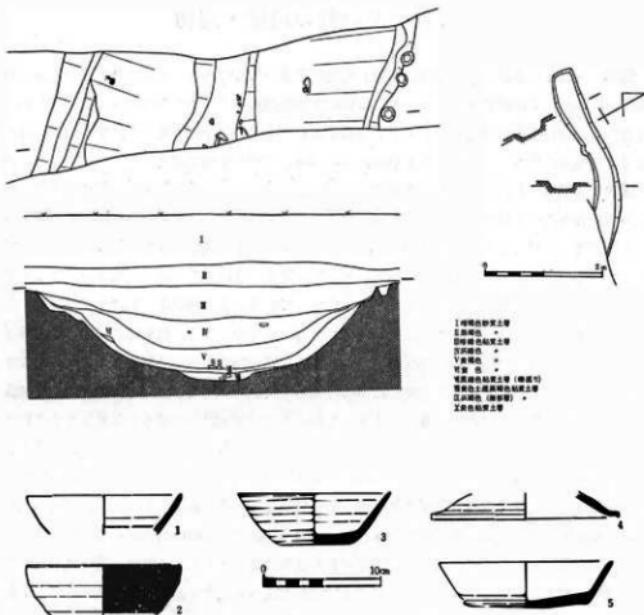
第41図 土塚墓実測図

第4節 溝 址

全体で7ヶ所確認されているが、ほとんどが人工的なものと思われる。ただ本来の溝の用を供するものは溝址3の大溝のみである。溝址3は調査地中央付近から検出したもので底面の比高から北から南、即ち自然堤防上から千曲川の低地への流路をとる。規模は上面2.3cm・深さ157cmを測る。底面付近には礫が多くみられ、更にその下部に巾1.3m・深さ12cmの溝があり砂が多く混じり明らかに水の流れた様子がうかがわれる。前記の礫間に大形獸骨片が散乱していた。また東壁側縁に径25cm・深さ20~27cmのピットが3個あり、西壁は2段の段をなす。この遺構からの出土遺物は多く主として土器類・須恵器甕・蓋・壺形土器の破片で壺形土器には底部に糸切り痕を有するものと、ヘラ切離で高台が付されるものがある。この他鉄滓も出土している。時期はこれらの年代に求められよう。溝址1の上部には1列の配石が認められ、暗渠排水遺構と考えられている。この配石間に内耳付土器片があった。



第42図 溝址2・4・5 実測図



第43図 溝址3・6実測図、溝址1～3出土土器

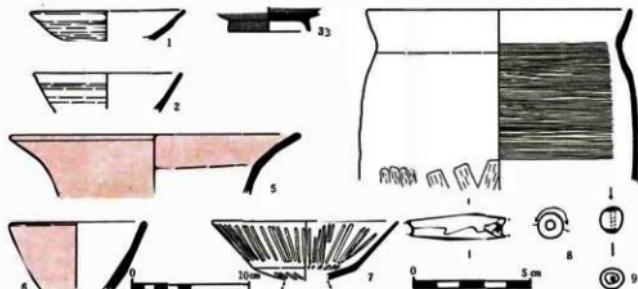
表2 溝址

番号	図番号	プラン	規模 (確認長×巾×深さ) m cm cm	出土 遺物	備 考
1	6	U字溝	4.6× 78 ×東33・西39	内耳付土器・須恵器 壊・礫	暗渠排水溝か・東から 西へ 南西から北東へ
2	42	タ	2.2× 0.56 ×北40・南37		
3	43	タ	2.3× 5.50 × 157	土師器・須恵器壊・ 蓋・歯骨・鉄鋤	北から南へ
4	42	タ	4.2×58～1.10×北31・南33		北西から南東へ
5	42	タ	4.5×0.60～76×北7・南15		北から南へ・くの字形 に屈曲
6	43	タ	3.3×0.37～48×東8・西13		東端で南方向へ
7	33	タ	3.2×0.50～75×北9・南43		北から南へ

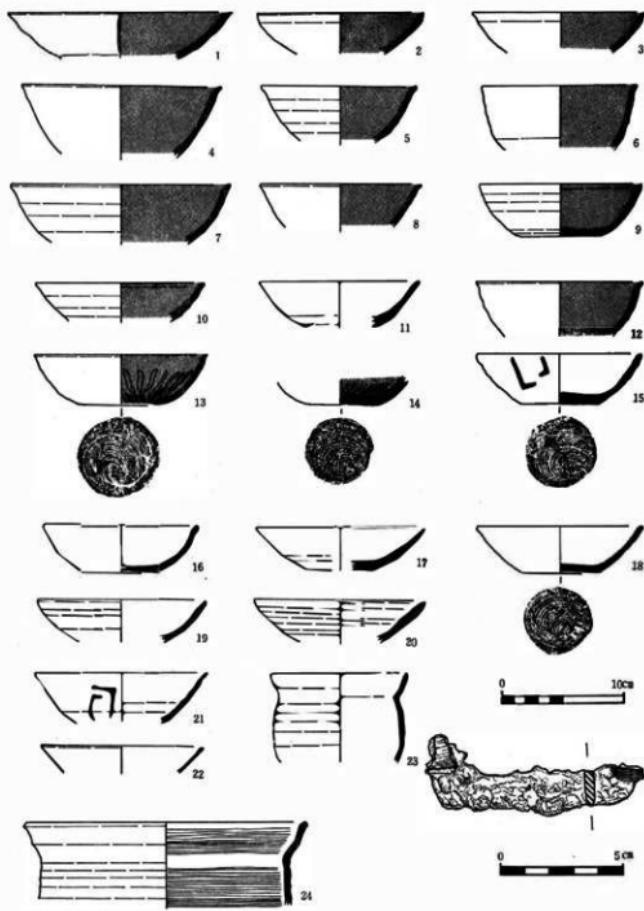
第5節 その他の遺構・遺物

遺構 (第1～3図) 単独では意味のもたない遺構をここで扱う。ピット及び浅い土壤状の遺構で、井戸址4の西に2つのピット、第18号住居址の東に径25cmのピット、第16号住居址付近に掘り方様で内に柱穴らしきピットを有するもの2個が1.1mの間隔で、更に第25～28号住居址の周辺にピット・土壤状のものがあったが何の遺構か不明である。

遺物 (第44・45図) 包含層及び遺構に伴なわないものを一括して上げる。調査地が狭いせいか意外とみるべき資料がすくなく第45図にみると第8～11号住居址にかけての検出面から土師器壊・変形土器・須恵器壊形土器及び土錘・土製小玉・火打ち金具様鉄製品が出土している他は第44図に図示したとおりである。また井戸址3・4付近から椀形・浅鉢形になると思われる緑渦色を呈し薄い釉の青磁片が各1点出土している。第45図の1～14は土師器壊形土器片で、体部が内彎しながら立ち上がり口縁部が外反するものが多く、11を除いてすべて内面が研磨され黒色処理される。13には放射状暗文がある。15～22は須恵器壊形土器でロクロによりつくられており、ロクロ目を残す他、底面には糸切り痕がある。器形は土師器のそれと比べ浅く、体部が直線的で口縁部が素直におさまるものが多い。15・21には第8号住居址出土の墨書き土器のそれと同じ墨書きがあり、その住居址に付属するものかもしれない。22は椀形の乳灰色を呈する灰釉陶器である。23・24は口縁部が内彎気味の鈍い段をなし、体部が直線的で、最大径が口縁部にある器形になり、体部外面にロクロ整形痕を残す変形土器である。第44図は第45図で示した地域以外からで、須恵器壊形土器(1・2)・土師器には断面三角形の高台が付され、両面が黒色処理される壊形土器と、外面にロクロ整形痕及びヘラケズリ痕を、内面は刷毛整形痕を残す変形土器がある。5・6は弥生式土器で壺と浅鉢形土器である。7は柱穴様ピットを有する西側遺構から出土した高壊形土器の破片である。



第44図 その他の遺物



第45図 第8～11号住居址検出面出土遺物

第4章 結 語

本調査は約300mという長い距離の、堤防直下ということで、1~5mのトレンチ状調査地であった。このため一部危険防止のため調査できなかった地域もあるが、出来る限り調査地を露呈し、遺構確認に努めた。その結果は第3章で述べたとおりであるが、その全容を確認できたものがないのは残念であった。

検出遺構は住居址31軒・井戸址8ヶ所、方形周溝墓・土墳墓各1基、溝址7ヶ所である。住居址は出土遺物・形態から次の時期に分けられる。尚住居址の重複関係は新しいものから第9号→第10・11号、第15号→第14・16号、第20→第21号→22号、第24・25号→第23号→第22号、方形周溝墓→第29・30号の新旧関係を知り得た。

弥生時代 第16・19・22~25・27・31号住居址

古墳時代 第14・15・18・20・21・26・28~30号住居址

平安時代 第1~11・12号住居址

このように遺構の分布をみると調査地東側では平安時代の集落があったようだ、西側では古墳時代以前の住居址が集中するように遺跡群内で時期によるまとまりが各所にあった様子がうかがい知れる。

またこれらの中から出土した土器を見るに、弥生時代では第16号住居址が最も古く吉田式土器にあてることができ、他は箱清水式土器である。この時期の住居形態は第16号住居址が隅丸方形になるものと思われ、第19・22・23号住居址は隅丸長方形になり、他は隅が比較的角ばっているようである。古墳時代では善光寺平第1様式（五領1併行）のものに、第14・15・20・21・26・29・30号住居址があり、器種に第14号住居址から赤色塗彩され器台形土器がある他は無地のもので3円孔があけられる器台形土器・小形丸底形土器・長頸の壺形土器・S字状口縁の影響を思わせる壺形土器等がある。これらは櫛状の刷毛による整形が施されるのを特色としている。この手の土器群は本調査地周辺では初見のもので、近くでは下条灰塚遺跡に求められる。第Ⅲ様式（鬼高郡併行）のものに第18・28号住居址がある。塩崎遺跡群内で主流を占めていたこの時期が少ないのが気になるが、占地密集度を考慮すれば納得がいく。また第18号住居址にのみ覆土中に角礫・円礫が無難作に投げ込まれており、一部は床面に接する。屋根材のおさえに使用していたにしては普遍的にみられない点問題である。第Ⅳ様式（奈良時代比定）のものはなかったが、第V様式（平安時代比定）になると調査地東側に多く認められ、西側において遺構こそなかったが、相当量の遺物が出土しており近隣に遺構があるものと思われる。何故に東側に集中するのかを考えるに、古墳時代以前においては確認面の土質が砂っぽくなることから、そして現在千曲川の流路にそれ程変化がないものと思えるので、この地は千曲川の濁水

をたびたび受け不安定な地であったことが想像され、そのため住居構築の地として敬遠されたのであろう。平安時代に至って人口増のため占地拡大が行なわれた結果、このようななり方を示すのであろうと考える。遺物は第8号住居址からまとめて出土し、土師器・須恵器の环形土器・變形土器等の日常什器に限られる。中に墨書き器が含まれ注目される。

井戸址は8ヶ所確認されており、すべて円形で直に掘られ、湧水をみる。時期については平安時代比定の土師器・須恵器の破片が覆土にみられ、また3・4の周辺から青磁陶器片が出土しており、また堀の内の字名を残しており、簾ノ井氏又はそれ以前の豪族居館址と推定されることから案外この時期に求められるのではなかろうかと考えている。上屋の遺構・流し溝等が検出されなかったので、近接して2つ並んでいるものの用途等更に一考を用する。

墓址には土墳墓と方形周溝が検出されている。土墳墓は横臥屈葬であり、時期については副葬品がないので定かでないが、検出面から平安時代以降のものと思われる。方形周溝墓は北東隅付近の検出で全形を知り得ないが、相当大規模なものになると思われる。形は本文で各隅とも盛り上がるものと記した。基本形態は朝光寺原型か溝が全周する大宮公園型になるものと推定される。時期は下条灰塚期に求めることができ、この地域最古の墳墓川柳将軍塚古墳に先行するもので、また占地からも注目されるものである。この形態の墓址は近接する自然堤防上の遺跡塩崎小学校地点で弥生時代中期末葉の牛王堂山型のものが発見されており、この地においては山麓及び高所に構築されたというよりも集落址内の生活空間に求められるようである。今回調査したものは千曲川に面する自然堤防上南端の頂部に作られているといふところに重要な意味を有していると思われるし、また大規模な土木工事はやがて川柳將軍塚古墳の成立に重要な示唆を与えているものと思われる。

溝量には何のために掘られたのか意味不明なものが多い中で、3のあり方が注目される。わずか狭い範囲での確認であったが、流路は北から南へ、即ち後背湿地から自然堤防を縦断し千曲川に注ぎ込むといふことがいえるのではなかろうかと考える次第で、溝内底には礫・小石・鰐骨があり、ある程度の水量が流れていることが知られる故から前記が推定されるのである。この推定が正しければすでに平安時代に後背地より排水作業が行なわれていたことになり、条里状遺構に関与するものと思われる。

以上今回調査した結果を私見を加えながら覗見してきたのであるが、今後の調査で更に内容が深まることを期待してまとめとしたい。

参考文献

岩崎卓也他『下条灰塚』更埴市教育委員会 昭和46年

長野市教育委員会『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡の調査』第1・2次 昭和52・53年

大塚初重他『方形周溝墓の研究』『駿台史学』24所収 昭和44年

表3 出土図示土器一覧

第3号住居址出土土器(第6図)

通 総 番 号	器 種	法 量(cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	粘 土	燒 成	色 調		出 土 状 態
		器高	口径	底径					外 面	内 面	
1	环	14			椀形	ロクロ整形	小 砂	良好	黑色	黑色	覆 土
2	甕	17.6			口縁部ににおいて段	*	*	*	茶褐色	茶褐色	*

第5号住居址(第7図)

1	环	13		椀形	ロクロ整形	小 砂	良好	赤褐色	黑色	覆 土
2	*	14.2		环形	*	*	*	黄褐色	黄褐色	カマ
3	*	13.6		椀形	*	*	*	赤褐色	黑色	覆 土
4	*	13.6	9.6	口縁部外反、丸底ぎみ、高台	*	、ヘラケズリ	*	青灰色	青灰色	カマ
5	蓋		15.6	口縁部噴状、端部外反	*	*	*	*	灰白色	*
6	甕	18.8		長脚、口縁部外開	*	、ヘラケズリ	*	赤褐色	赤褐色	*
7	*	21.6	*	*	*	*	*	黄褐色	黄褐色	*
8	*	23.8	*	*	*	*	*	茶褐色	茶褐色	*
9	*	24.4	*	*	*	*	*	黄褐色	赤褐色	*

第6号住居址(第9図)

1	甕		7.6		ヨコナゲ、布目压痕	小 砂	不良	茶褐色	茶褐色	覆 土
---	---	--	-----	--	-----------	-----	----	-----	-----	-----

第7号住居址(第9図)

2	甕		27.8	口縁部立ち上がる	ロクロ整形	小 砂	良好	暗緑色	綠 色	覆 土
---	---	--	------	----------	-------	-----	----	-----	-----	-----

第8号住居址(第10図)

1	环	15.4		环形	ロクロ整形、ヨコナゲ、ヘラミガキ	小 砂	良好	黄褐色	黑色	床 面
2	*	6.3		椀形	*	*	*	赤褐色	*	*
3	*	12.8		*	*	*	*	黄褐色	*	*

遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土 状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
4	环	4.6	13.3	6	楕形	ロクロ整形、ヨコナデ、ヘラミガキ、暗文、糸切り	小 砂	良好	乳白色	黑色	床 土
5	*	5	13.6	5.7	*	*	*	*	*	赤褐色	*
6	*			5.4	*	*	*	*	*	黄褐色	*
7	*	4.2	14.6	5.6	环形	*	*	、糸切り	*	灰白色	*
8	*			6.2	底部のみ	*	、糸切り、ツケ高台	*	*	黄褐色	黑色
9	*	4.6	14.1	6.6	椭形	*	、ヨコナデ、糸切り	*	*	*	*
10	盤			13.2	底部、ツケ高台	*	、	*	*	赤褐色	赤褐色
11	甌	6.8	7	4.1	口縁部外反	*	、	、	*	黑褐色	*
12	壺			4.8	細口部がつくと思われる	ヨコナデ、ヘラナデ、	*	*	*	暗灰色	床 土
13	甌			14.2	口縁部や外側	ロクロ整形、ヨコナデ	*	*	*	赤褐色	赤褐色
14	鉢			22.5	口縁部わずかに外側	*	、	ヘラミガキ	*	黄褐色	黑色

第9号住居址(第12図)

1	环	4.6	14.6	口縁部外反、丸底	ヨコナデ、ヘラミガキ	小 砂	良好	赤褐色	黄褐色	床 土	
2	*	2.9	12.9	6.5	皿形	ロクロ整形、ヘラミガキ、ツケ高台	*	*	黑色	黑色	*
3	鉢			口縁部ゆるく外反	ヘラミガキ、ヨコナデ	*	*	赤褐色	*	床 土	
4	壺			長脚壺の口縁部のみ	ロクロ整形、ヨコナデ	*	*	青緑色	青緑色	*	

第10号住居址(第12図)

5	环	4	12.6	4.7	楕形	ロクロ整形、ヨコナデ、ヘラ切り	小 砂	良好	灰白色	青灰色	床 土
6	*	3.6	13.7	5.5	环形	*	*	、糸切り	*	暗青色	黄褐色
7	*	4	13	2.2	*	*	*	、ヘラ切り	*	暗灰色	青褐色

遺物番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	焼成	色 調		出土状態					
		器高	口径	底径					外 面							
									内 面							
8	环			5.6	楕形	ロクロ整形、ヨコナデ、糸切り	小 砂	良好	灰褐色	灰褐色	覆 土					
9	甕			18.5	口縁部反り、厚くなる	*	*	*	灰 色	灰 色	*					

第11号住居址(第13図)

1	环		13.9	環形	ロクロ整形	小 砂	良好	黄褐色	黄褐色	覆 土
2	*		13.9	*	*	*	*	暗灰色	乳灰色	*
3	*	2.5	11.2	3.8	*	*	*	深茶色	赤褐色	*
4	*		11.1	楕形	*	*	*	黄褐色	黑色	*
5	甕		26.1		*	*	*	黄绿色	黄绿色	*
6	*		6.8	底部に多孔	ナデ、底部に刻文	*	不良	赤褐色	赤褐色	*
7	瓶				ヘラケズリ、ナデ	*	良好	黑褐色	黑色	*

第12号住居址(第14図)

1	甕		21	長胴、最大径体部上半	ヨコナデ、ヘラケズリ、水粘土再調整	小 砂	良好	黑褐色	赤褐色	カマド付近
2	蓋			天井部平坦	ロクロ整形	*	*	青灰色	青灰色	*
3	甕		21	広口、鉢形	*	*	*	灰黑色	黑褐色	覆 土

第13号住居址(第15図)

1	环		16	環形、口縁部肥厚	ロクロ整形、ヨコナデ	小 砂	良好	黄褐色	黄褐色	覆 土
2	*		10.2	平底	*	*	、ツケ高台	黑灰色	黑灰色	*
3	*		7.4	*	*	*	*	紫黑色	黑褐色	*

第14号住居址(第17図)

1	杯		13.5	カブト形、内部に棱	ヨコナデ、ヘラミガキ	小 砂	良好	黄褐色	黄褐色	床 面
---	---	--	------	-----------	------------	-----	----	-----	-----	-----

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
2 鉢		18.2			浅鉢形、口縁部内凹 脚部ラッパ状	ヨコナデ、ヘラミガキ	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	床面
3 器台					口縁部大きく外開	ヘラミガキ	*	*	黄褐色	黄褐色	*
4 壺		19	4.7		底部のみ	ヘラ、ハケによる整形	*	不良	*	*	*
5 *						*	良好	*	明褐色	*	*

第15号住居址(第18図)

1 坩		10.2		口縁部直立後外反 脚部上半のみ	ヨコナデ、ヘラミガキ ナデ	小 砂	良好	灰褐色	灰褐色	青 土	
2 高杯				8.4	环底部に1孔	刷毛整形	*	*	赤褐色	赤褐色	*
3 器台				15.8	脚部ラッパ状、3孔	ヘラミガキ、ヨコナデ	*	不良	*	*	*
4 *				16.4	口縁部外開、中位やや肥厚、体部球形	刷毛整形、ヨコナデ、内部ヘラ整形	*	良好	橙褐色	赤褐色	*
5 壺			20		タ	ヘラ整形、ヨコナデ	*	*	黄褐色	黄褐色	*
6 *				5.6	口縁部に棱	*	*	不良	灰褐色	灰白色	床面
7 *				13.4	口縁部や内寄気味	刷毛整形、*	*	良好	暗褐色	暗褐色	*
8 増		9.8	13.2	4	体部扁平、口縁部外反、平底	ヘラナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	*	*	*	黄褐色	*

第18号住居址(第22図)

1 盆	10.2	14	4.6	不整形、底部丸味、口縁や外反	底部に円孔、ヘラ整形	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	床面
2 盖			26.4	天井部から口縁部が直線的	ロクロ整形	*	*	青灰色	青灰色	青 土
3 壺		32.6		口縁外反、体部球形に近い	ヘラ整形	*	*	赤褐色	赤褐色	床面

第19号住居址(第23図)

1 益				体部下部に最大形、無花果形	底部4単位の平行櫛描文、ヘラミガキ	小 砂	良好	赤 色	暗褐色	青 土
-----	--	--	--	---------------	-------------------	-----	----	-----	-----	-----

遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土 状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
2	壺		23.8		壺口縁部、嘴部わずかに立ち上がる 環部丸錐形	ヘラミガキ *	小砂	良好	赤色	赤色	覆土
3	高环						*	*	*	*	*

第20号住居址(第24図)

1	壺	18.8	縁部「く」の字状	ヨコナデ、ヘラミガキ	小砂	良好	赤褐色	灰褐色	覆土
---	---	------	----------	------------	----	----	-----	-----	----

第21号住居址(第26図)

1	壺	19.8	口縁部外反、球形胴	刷毛整形、ヘラケズリ、ヨコナデ	小砂	良好	暗褐色	暗褐色	覆土
2	*	22.1	*	ヘラ整形、ヨコナデ	*	*	橙色	橙色	*
3	*	11.5	小形、球形胴	外面刷毛整形、内面ヘラ整形	*	*	赤褐色	暗褐色	*
4	*	11.2	10.6 3.6	刷毛、ヘラによる整形	*	*	黒褐色	暗褐色	*
5	壺	13	口縁急に立ちあがる、球形胴	ヘラミガキ、ヨコナデ	*	*	黄褐色	赤橙色	*
6	器台	12	脚部ラッパ状、杯底部より1孔、中位に4孔	*	*	*	暗褐色	暗褐色	*

第22号住居址(第28図)

1	高环	17.4	体部内寄気味、口縁部立ち上がる	内外面とも研磨	小砂	良好	赤色	赤色	覆土
2	*	20.5	*	*	*	*	*	*	*
3	*	23.8	*	*	*	*	*	*	*
4	*	28	体部に段、口縁部外反	*	*	*	*	*	*
5	*	9.1	脚部短くラッパ状	外面研磨	*	*	*	黄褐色	*
6	*	10.2	*	*	*	*	*	*	*
7	*	14	*	*	*	*	*	*	*
8	鉢	6.2 13 4.3	三角窓4孔 平底、体部直線的	内外面研磨	*	不良	*	*	*

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
9	蓋		3.6		上端くぼむ	ヘラナデ	小砂	良好	茶褐色	黒褐色	覆土
10	*		2.8		*	外面研磨	*	*	赤色	暗褐色	*
11	甕		22		口縁部受け口	櫛描波状文、ヨコナデ、ヘラミガキ	小砂、石	*	黒褐色	茶褐色	*
12	*		16.4		口縁部やや外反、最大径肩部	櫛描波状文、縦状文、ヨコナデ、ヘラミガキ	*	*	赤褐色	灰褐色	*
13	壺		19.8		口縁部受け口、縁部外反気味	内外面研磨	*	*	赤色	赤色	*
14	*				縁部外反気味	縁部に文様帯、外面研磨、内外面部上研磨	小砂	不良	赤色	黄褐色	*

第23号住居址(第29図)

1	高环			脚部上半のみ	外面研磨	小砂	不良	赤色	赤褐色	覆土
2	壺		30.3	口縁部受け口	内外面研磨	*	良好	*	赤色	*

第24号住居址(第30図)

1	甕		32	口縁部受け口	櫛描波状文、ヨコナデ	小砂	良好	茶褐色	赤褐色	覆土	
2	鉢	9.8	17.7	4.1	体部やや内弯気味	内外面研磨	*	*	赤色	赤色	*
3	甕		7.5	台付甕と思われる	ヨコナデ、暗文風みがき模	*	*	黒褐色	茶褐色	*	

第25号住居址(第31図)

4	蓋		3.5	上面くぼむ、体部大きく聞く	ヘラミガキ、ナデ、刷毛整形	小砂	不良	茶褐色	茶褐色	覆土
5	高环		21.6	体部のみ、やや内弯しながら外開	内外面研磨	*	良好	赤色	赤色	*
6	*		7.6	脚部のみ、同ラッパ狀	外面研磨、ヨコナデ	*	*	*	黄褐色	*
7	*		12.6	*	*	*	不良	*	灰白色	*
8	壺		14.1	口縁部外反、体部球形	外面、内外面部以上研磨	* (目)	良好	*	赤色	*

第26号住居址(第32図)

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	器台	9.6	8.3	12.1	棒部皿状、脚部ラッパ状、3円孔	ヨコナデ、ヘラミガキ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
2	*		7.9		棒部直線的に開く、底部中央に1孔	*	*	(好)	*	*	*
3	環	5.6	13.2		体部浅く丸底、口縁部との境に段	ヨコナデ	小砂石	*	*	*	*
4	甕			4.5	底部上げ底	*	++	+	黄灰色	黄灰色	*
5	*		9.4		口縁「く」の字状、体部に最大径	ヨコナデ、指圧痕、刷毛状工具の整形	小砂	*	赤褐色	灰褐色	*

第27号住居址(第33図)

1	甕	19.2	口縁立ち上がる	楊柳葉状文、盤状文、ヨコナデ	小砂	良好	黒褐色	灰褐色	覆土
2	壺	8.8	底部のみ	ヨコナデ、ヘラミガキ	小砂(好)	*	*	黒褐色	*
3	瓶	5.3	底部に1孔	*	小砂、石	*	黄褐色	赤褐色	*

第28号住居址(第34図)

1	甕	24.2	短かい脚部大きく外反、体部直線的	ヨコナデ、ナデ	小砂(好)	不良	茶褐色	黒褐色	覆土
2	*		底部のみ	ヘラミガキ、ナデ	(好)	良好	灰褐色	赤褐色	*
3	*		*	ヘラナデ、ハケナデ	小石	*	黒褐色	*	*
4	*	15.2	底部「く」の字状直線的に外開	ヨコナデ、ヘラミガキ	小砂(好)	*	赤褐色	*	*
5	*		底部のみ、上げ底	ナデ	小砂(好)	不良	黒褐色	黒褐色	*

第29号住居址(第35図)

1	壺	17.1	口縁直線的に外開	刷毛整形のちへラナデ	小砂	良好	黄褐色	黄褐色	床面	
2	環	6.6	13.8	不整形、底部小さな平底、陶形	刷毛整形、ヘラミガキ、ヨコナデ	(好)	*	茶褐色	黒褐色	*
3	甕	18		口縁部のみ、外開、	刷毛整形、ヨコナデ	小砂石	*	赤褐色	茶褐色	*
4	*		9.4	底部のみ	ヘラ整形	(好)	不良	*	赤褐色	*

第30号住居址(第36図)

遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土 状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	高環		15.9		体部下方に鈍い棱	ヨコナデ、刷毛整形	小砂	良好	橙色	橙色	覆土
2	*(?)		10.3		上半簡状壺部大きく外開、境に3孔	ヨコナデ、ヘラミガキ	*	*	黄褐色	黄褐色	床面
3	器台				底部から脚部に1孔	ヘラナデ	*	*	橙色	橙色	*
4	甕		4		底部のみ	ナデ	*	*	黑褐色	灰褐色	*
5	壇(?)		15.1		口縁部有段	ヨコナデ、ヘラミガキ	*	*	黄褐色	黄褐色	*
6	*				小形丸底形土器、体部浅い	ヨコナデ、刷毛整形	*	*	黑褐色	*	*

方形周溝壺(第40図)

1	甕	24.1	16.3	7.1	口縁部外反、平底、体部球形状	ヘラナデ、指壓圧痕	小砂	良好	赤褐色	黄褐色	底面
2	*		19.3		口縁部大きく外反、端部外面面取り	刷毛整形、ヘラミガキ	*	*	*	茶褐色	下層
3	*		16.8		口縁部大きく外反	*	*	*	茶褐色	*	*
4	*			8	底部のみ	*	、ナデ	、石	*	赤褐色	*
5	壇		13.1		口縁部立ち上がり、端部でやや外反	*	、ヨコナデ、ヘラナデ	*	*	赤褐色	*
6	環		12.1		口縁部肥厚、体部丸味	*	、ヘラナデ、ヘラケズリ	*	*	暗褐色	茶褐色
7	高環	16.1	17.1	11.6	直線的に外開、体部下部に棱、脚窪部ラッパ状	ヘラミガキ、ヨコナデ	*	*	赤褐色	黄褐色	上層
8	*				筒形脚部のみ	*	、ナデ	*	*	赤褐色	*
9	*				脚部のみ、窪部大きく聞く	*	*	*	*	*	*
10	壇	19.1	9.8		口縁部立ち上がる、肩部張る、丸底	ヨコナデ、かき目	*	*	乳白色	乳白色	*

溝 壺 1(第43図)

1	壺		13.3		楕形	ロクロ整形、ヨコナデ	小砂	良好	黄褐色	黄褐色	覆土
2	*		13.1		*	*	*	*	赤褐色	黑色	*

溝 址 2(第43図)

遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土 状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
3	环	4.6	13	6.1	环形	ロクロ整形、ヨコナデ	小砂石	良好	灰黑色	灰黑色	覆土

溝 址 3(第43図)

4	蓋	4	16	天井部彎曲、口縁部直立	ロクロ整形	小砂	良好	青灰色	青灰色	覆土
5	环	4	14.7	9.8 底部が高台より出る、口縁部外側	*、ヘラ切り	*	*	暗灰色	暗灰色	*

第8~11号住居址検出面(第45図)

1	H6		18.6	楕形	ロクロ整形、ヨコナデ	小砂	良好	黄褐色	黒色	検出面
2	*		13.5	*	*	*	*	黒褐色	*	*
3	*		14.2	*	*	*	*	赤褐色	*	*
4	*		16.3	*	*	*	*	*	*	*
5	*		12.6	*	*	*	*	黄褐色	*	*
6	*		12.5	*	*	*	*	*	*	*
7	*		18	*	*	*	*	赤褐色	*	*
8	*		13.1	*	*	*	*	黄褐色	*	*
9	*	4.3	13.2	6.1	*	*	*	*	*	*
10	*		13.8	*	*	*	*	*	*	*
11	*		13.1	*	*	*	*	*	黄褐色	*
12	*		13.4	*	*	*	*	*	黒色	*
13	*	4	14.1	6.2	*	*	*	*	*	*
14	*			4.5 底部のみ	*	*	*	茶褐色	*	*
15	*	4	13.3	6.3	楕形	*	*	灰白色	灰白色	*

遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土 状態	
		器高	口径	底径					外 面	内 面		
16	环	3.8	12.6	6.5	楕形	ロクロ整形、ヨコナデ、暗文、糸切り	小 砂	良好	青灰色	灰白色	検出面	
17	*	3.4	13.7	5.2	环形	*	*	*	*	灰白色	灰色	*
18	*	3.8	13.4	6.4	*	*	*	*	*	灰白色	灰色	*
19	*		13.8	*	*	*	*	*	*	灰色	灰色	*
20	*		14	*	*	*	*	*	*	赤褐色	黒褐色	*
21	*		14.2	*	*	*	*	*	*	乳灰色	青灰色	*
22	*		13.2	*	*	*	*	*	*	乳灰色	乳灰色	*
23	甌		11.1	口縁部内寄気味、最大径口縁部	*	*	良 遅	*	*	茶褐色	黒褐色	*
24	*		22.9	*	*	*	*	*	*	赤褐色	赤褐色	*

その他の遺物(第44図)

1	环	12.9	环形	ロクロ整形 ヨコナデ	小 砂	良好	灰白色	灰白色	検出面
2	*	12.5	楕形	*	*	*	灰褐色	*	*
3	*	6.8	底部のみ	*	*	黑色	黑色	黑色	*
4	甌	22.5	口縁部わずかに内寄しながら外開	*	*	橙 色	赤褐色	赤褐色	*
5	壺	24.6	口縁部大きく外反	ヨコナデ、ヘラミガキ	*	赤 色	赤 色	赤 色	*
6	鉢	11.2	わずかに内寄しながら外開	*	*	*	*	*	*
7	高环	16	直線的、環部下半に後	ヨコナデ、ヘラミガキ、暗文	*	黄褐色	黄褐色	黄褐色	土

第一圖版 遺跡近影



中央より西侧



中央より東側

第二図版 東側遺構群



西より



東より

第三圖版
第一—四號住居址·溝址一



第1·2號住居址



第3·4號住居址·溝址1



第5号住居址



第6号住居址

第五圖版 第七·八号住居址



第7号住居址



第8号住居址

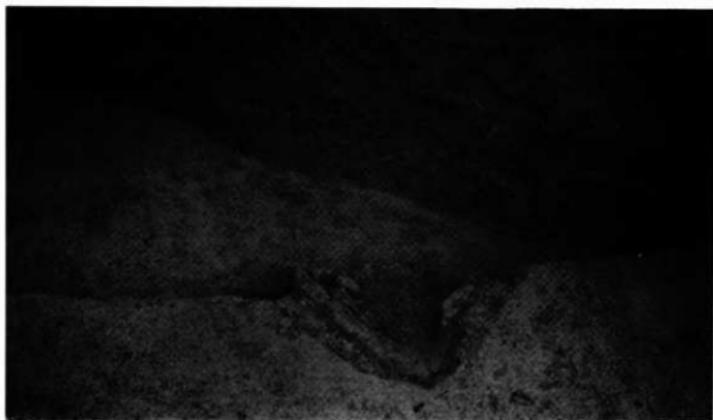


第9・10号住居址・井戸址5



第11号住居址

第七圖版 第二三·一五号住居址



第13号住居址



第八圖版
第一九·二二号住居址



第19号住居址



第21号住居址

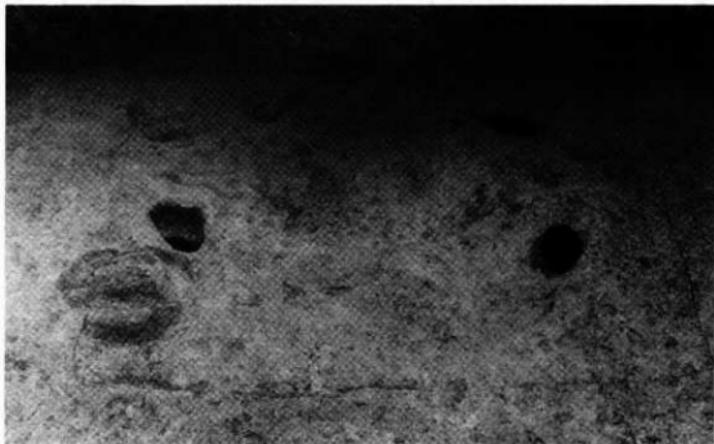
第九圖版
第二二一·二三二号住居址



第22号住居址



第23号住居址



第17号住居址

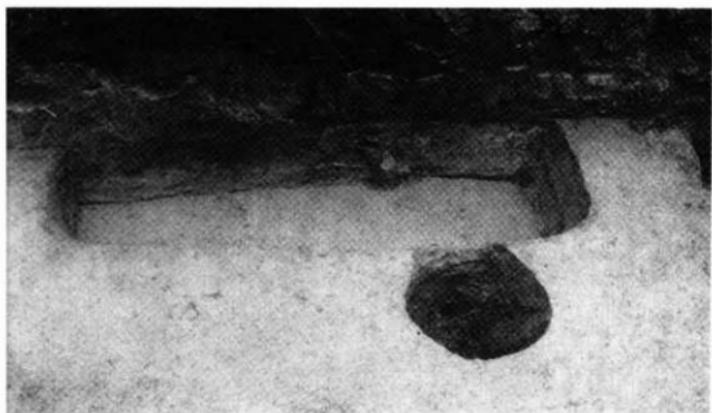


第18号住居址

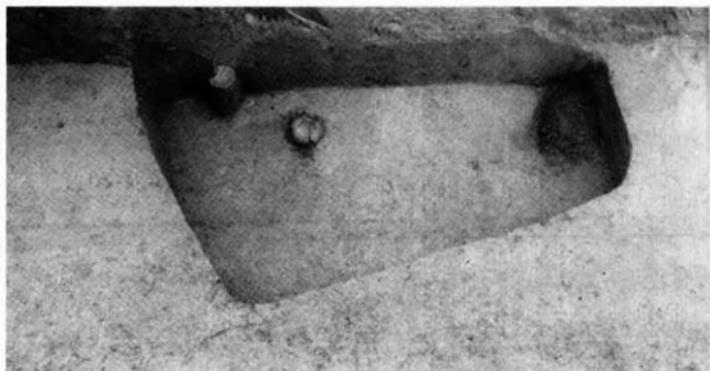
第一一圖版 第二十四～二六号住居址



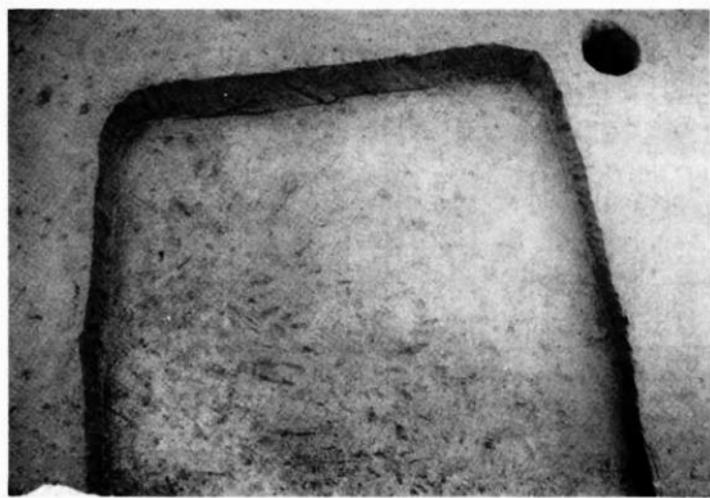
第24・25号住居址



第26号住居址



第27号住居址



第28号住居址



第24号住居址より東側



溝址 5 より西側



第29号住居址

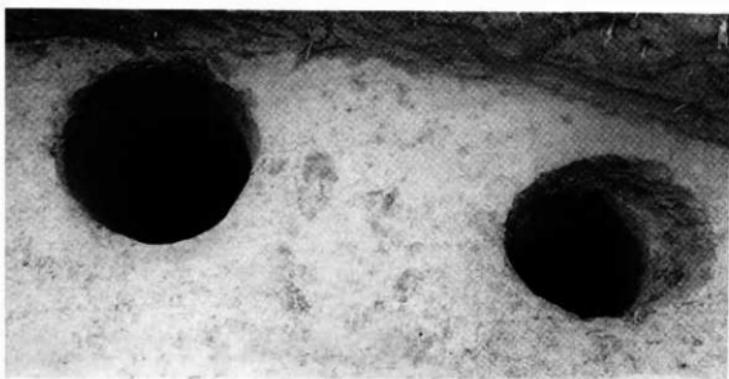


第30号住居址

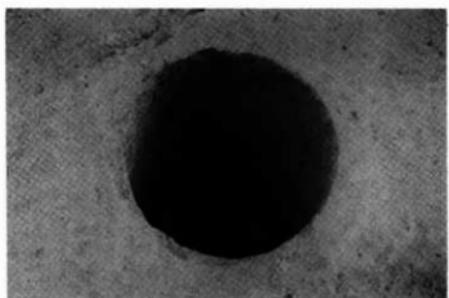
第一五四版
第三二号住居址・井戸址三・四



第31号住居址



井戸址 3・4



井戸址 1

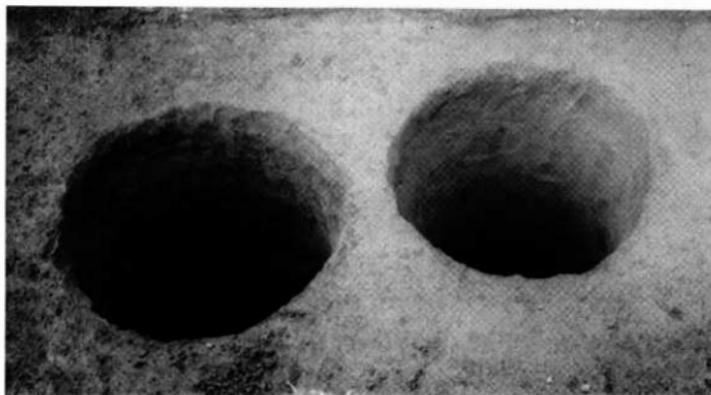


井戸址 2



井戸址 8

第一七圖版 井戸址六・七・方形周溝墓



井戸址 6・7



方形周溝墓

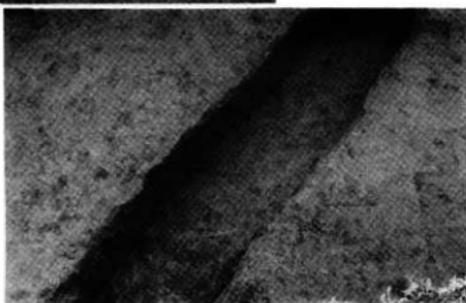
第一八圖版 方形周溝墓



第一九圖版 土塚墓・溝址一・四



土塚墓



溝址 1

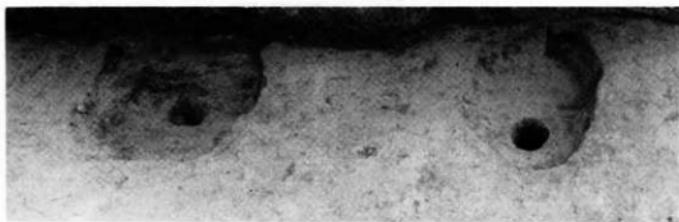


溝址 2

第二〇図版 溝址三・掘り方状遺構



溝址 3



掘り方状遺構